

人間文化

Vol. 4
2006

特集

人間文化研究機構 第4回公開講演会・シンポジウム
総合地球環境学研究所上賀茂施設竣工記念

人はなぜ花を愛でるのか？

オーガナイザー

日高敏隆 総合地球環境学研究所長

白幡洋三郎 国際日本文化研究センター・教授

ディスカッサント

秋道智彌 総合地球環境学研究所・教授

大西秀之 総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員

岡田康博 青森県教育庁・三内丸山遺跡対策室長

小川勝 鳴門教育大学・助教授

小汐千春 鳴門教育大学・助手

小山修三 吹田市立博物館長／国立民族学博物館・名誉教授

佐藤洋一郎 総合地球環境学研究所・教授

高階絵里加 京都大学人文科学研究所・助教授

武田佐知子 大阪外国語大学・教授

渡辺千香子 大阪学院短期大学・助教授



人間文化 vol. 4

特集

人間文化研究機構 第4回公開講演会・シンポジウム
総合地球環境学研究所 上賀茂施設竣工記念

人はなぜ花を愛でるのか？

日時:2006年5月27日(土)

場所:国立京都国際会館 アネックスホール

目次

あいさつ

石井米雄 _____ 1

司会あいさつ 長野泰彦 _____ 2

公開講演会・シンポジウム _____ 3

人はなぜ花を愛でるのか？

オーガナイザー

日高敏隆 動物行動学

白幡洋三郎 庭園史・産業技術史

ディスカッサント

秋道智彌 生態人類学・民族生物学

大西秀之 人類学・考古学

岡田康博 考古学

小川 勝 美術史学・芸術学

小汐千春 動物行動学・行動生態学

小山修三 考古学・文化人類学

佐藤洋一郎 遺伝学・DNA考古学

高階絵里加 美術史

武田佐知子 日本史・衣服史

渡辺千香子 アッシリア学・美術史

閉会のあいさつ 長野泰彦 _____ 57

人はなぜ花を愛でるのか？

あいさつ

石井米雄 (人間文化研究機構長)

人間文化研究機構長の石井米雄です。今回のシンポジウムは会場が広いので席が埋まらないのではないかと心配していたのですが、おかげさまでこんなに多数の皆様においでいただいて、たいへんうれしく思っております。

まず私どもの人間文化研究機構について簡単に説明いたします。二年前に国立大学が全部法人化したのですが、その際、日本全国に十六ありました国立の大学共同利用機関も四つに再編され、その中から人間文化に関係する機関が五つ集まって、人間文化研究機構というものができ上がったわけです。

五つと言いますのは、今回のシンポジウムの中心になっていた京都の総合地球環境学研究所、同じく京都にあります国際日本文化研究センター、関西では吹田にあります国立民族学博物館、それから東京にあります国文学研究資料館、加えて千葉県の佐倉にあります国立歴史民俗博物館です。このように五つの研究機関が一緒になりましたので、そのメリットを生かすべく、われわれが取り組んでいるさまざまな研究成果を皆さんに知っていただくこうと、このようなシンポジウムを年に二回開催することにしたわけです。シンポジウムは、今回で四度目の開催になります。

本日のテーマは「人はなぜ花を愛でるのか？」というものです。この世の中に花が嫌いな方はほとんどいないと思いますが、ではなぜ好きなのだろうか。これを学際的にいろいろな分野から議論してみようというのが今回の趣旨です。私にとっては考えたこともなかった問いなので、今日はたいへん期待しております。皆様のお話を興味深く伺いたいと思います。

司会あいさし

長野泰彦

(人間文化研究機構理事)

ただいまから人間文化研究機構第四回公開講演会・シンポジウムを開催いたします。本日の司会を務めます人間文化研究機構の長野泰彦です。よろしく願います。皆様にはお忙しいところ多数お出まされいただき、本当にありがとうございます。

人間文化研究機構というのは五つの大学共同利用機関が集まって二年前にできた新しい組織で、私どもの研究成果を一般の方々に広く知っていただくために、機構に属する研究機関、あるいは関連する他の大学と共同して、このようなシンポジウムを定期的開催しております。

本日のシンポジウムの進行は、オーガナイザー兼コーディネーターを務めていただく総合地球環境学研究所長の日高敏隆先生と、国際日本文化研究センター教授の白幡洋三郎先生のお二人にお願いしております。よろしく願います。

オーガナイザー

日高敏隆

(総合地球環境学研究所長)

白幡洋三郎

(国際日本文化研究センター・教授)

デイスカッサント

秋道智彌

(総合地球環境学研究所・教授)

大西秀之

(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員)

岡田康博

(青森県教育庁文化財保護課
三内丸山遺跡対策室長)

小川勝

(鳴門教育大学・助教授)

小汐千春

(鳴門教育大学・助手)

小山修三

(吹田市立博物館長／
国立民族学博物館・名誉教授)

佐藤洋一郎

(総合地球環境学研究所・教授)

高階絵里加

(京都大学人文科学研究所・助教授)

武田佐知子

(大阪外国語大学・教授)

渡辺千香子

(大阪学院短期大学・助教授)

(五十音順)

人はなぜ花を愛でるのか？

日高敏隆

総合地球環境学研究所の日高敏隆です。本日は「人はなぜ花を愛でるのか？」というテーマでシンポジウムをいたします。

私は動物学者なので、『チョウはなぜ飛ぶか』などという変な本を書いたことがあります。チョウはなぜ飛ぶのかなどと言ってみても、「なんでだつていいじゃないですか」という具合に答えが出ないことが多いのです。同じように、人はなぜ花が好きなのかと問うても、なかなか答えは得られません。でも何かあると思うのです。

こうしていま私が立っている演壇にも、やはり花がたくさん飾ってあります。どうしてでしょう。どうしてだかわかりませんが、何もないとやはり寂しいのです。何かちょっと欲しいなと思うのです。花があるとその場が華やいで、何かいい感じになるのです。そのような感覚は何なのだろうと、私は非常に不思議に思っていました。人はなぜ花が好きなのかというのは、私が前々から抱いていた疑問です。

たとえば、人間が「食べるもの」を好きなのは当然です。

しかし、花というのは常識的には食べるものではありません。衣服にもなりません。人間は家を建てますが、花で家を建てることもできません。要するに、何の役にも立たないのです。ところが、その花を皆が好きで、何か会があると必ずと言ってよいほど「花束贈呈」をやりま

す。なぜなのだろうということをずっと考えていて、今回、ようやくこのテーマを議論する機会を得たわけです。ところが、いろいろ調べてみても、こんなことを研究している方はいません。普通であれば、まず基調講演で「人はなぜ花を愛でるのか？」という話を、何とか大学の何とか先生にしていたらいいか考えまして、結局、多少なりとも接点のありそうなさまざまなジャンルの研究者の方々にお集まりいただき、私と白幡さんが進行役のような形になって、皆さんと「掛け合い」のようにディスカッションしながら、手がかりを見つけていったらどうかということになりました。

ですから、今日はこれまでの人間文化研究機構の三度のシンポジウムとはスタイルがやや異なっております。シナリオのようなものは書かれておりません。皆で走り

ながら考えてみようといった趣きになると思います。

では、私と一緒に進行役を努めてくださいます白幡さんからも一言お願いします。白幡さんは私と違って文化のほうの方ですから、今日はそちらの方面からサポートしていただけると思います。

白幡洋三郎

国際日本文化研究センターの白幡洋三郎です。日高先生からいま趣旨を説明していただいたわけですが、私も最初にテーマをうかがったときは、ちよつとびっくりしました。人はなぜ花を愛でるのかなんて、これまでほとんど考えたことがなかったからです。私は自分のことを「花の専門家」だと思ってきたのですが、私の専門は、すでに花というものが人類の身近にあつて、食べられもしない、役にも立たないけれども、それを使っていろいろな文化活動をやっている時代の話です。「人は花を愛でるものである」というのが最初から前提になっていたわけです。ですから、それ以前の問題である「なぜ花を愛でるのか」というのはなかなか根源的な問いでありまして、さすがに「なぜチョウが飛ぶか」という質問をされた日高さんらしいと思いました。そこで、これは一緒にやらせていただくしかない、ここに参つたような次第です。

日高 今日さまざまな分野から十名の研究者の方々にデイスカッサントとして来ていただいています。その方々

に伺つてみたいことを先にちよつと挙げてみます。

まずは、人はいったいいつごろから花を愛でるようになったのかということ。たとえば、大昔の洞窟壁画などにはりっぱな絵が描かれています。そこに花は描かれていたのでしょうか、いないのでしょうか。

また、四十年くらい前になりますが、『シャニダール洞窟の謎』という本が大きな話題になりました。われわれホモサピエンスよりもつと前のネアンデルタール人が死者に花を捧げていたらしいといった話です。なかなか感動的な内容で、覚えている方もおられると思いますが、この説がその後どうなったのかを知りたいと思います。

また、「花は美しいから好きなのだ」と、皆さんお思いでしょう。私もそう思うのですが、よく考えてみると、花は人間のために美しいのではありません。花屋さんで売っているような花はみな人間が育種をして、人間のために美しく作り上げたものですが、野原に咲いている花は、別に人間のためにきれいになったわけではありません。では、いったい誰のためにきれいなのか、これも伺いたいと思います。

それから、いまわれわれの身の回りには花があふれていますので、昔から花があつたように思いがちですが、本当に花は昔からあつたのでしょうか。たとえば人間がまだアフリカの森の中にゴリラなどと一緒に住んでいたころ、森の中に花など咲いていたのでしょうか。改めて考えると、なかつたのではないかと気がします。そのあたりのご専門の方も今日はお招きしています。

有名な植物の学者に中尾佐助先生という方がいらっしやいます。中尾先生は人間には美しいものを好む美学があるが、それには、人間にもともと備わっている本能のような美学と、「こういうものを美しいと表現する」といった具合に文化的、観念的に後から獲得した美学があるとおっしゃっています。そうしますと、花には象徴的な意味もあるでしょうし、自然的な意味もあるでしょう。いま申し上げたようなさまざまな要素を絡み合わせて考えてみたら、「人はなぜ花を愛でるのか」ということについて、何かわかってくるかもしれないと期待しています。

洞窟壁画に 花は描かれていたか

白幡 では、最初の洞窟壁画のことからお話いただくことにしましょう。たとえば、たいへん有名なものに「ラスコー洞窟」の壁画がありますが、あの壁画には花は描かれていたでしょうか。たしか動物ばかりだったように思いますが、この分野の専門でいらっしやる鳴門教育学の小川勝先生、お願いします。

小川勝

(図版は6ページ)

私は約三万年前に作られるはじめた洞窟壁画を専門に勉強しております。このシンポジウムは花がテーマで、古い

時代の花の表現がどういうものだったのかを述べるために私はこの場にいるわけです。しかし、残念ながら、人間が作ったものとも古い美術作品である洞窟壁画には、はつきりした花の表現は見出せておりません。

まずいくつか、典型的な洞窟壁画を紹介しましょう。南フランスのショーヴェという洞窟で発見された向かい合う二頭のサイの絵は、黒い線に使われた木炭の科学的な年代測定により、約三万二千年前のものということがわかりました。いま知られている限りでは最古の写実的な美術作品です。向かい合うサイの迫力など、人類最初の芸術がきわめて優れたものであったことがわかります。

また、有名なラスコー洞窟の壁画もあります。走っていくウマのダイナミックな感じが非常によく表されています。そして、スペインのアルタミラ洞窟で最初に発見されたウシの絵です(図①)。これらの動物のほかにも、何を表現したのかわからないような幾何学的な文様なども描かれています。はつきりと花とわかる絵はまったく見つかりません。

それは、おそらく当時の人びとの関心の中に花というものが存在していなかったためと思われる。洞窟壁画の時代、人びとは主に狩猟で生活していましたので、動物に関心が集中して、花のようなものを愛でるまでには至らなかったのではないのでしょうか。人はやはり関心のないものは絵に描かないと思うのです。

とはいえ、動物の絵ばかりお見せしても私がここにいる意味がありませんので、もう少し新しい時代のものも



図③ 実の落ちた樹木他。ドーニャ・クロティルデ岩陰、スペイン。約 6,000年前、高さ10センチ（樹木）



図① ビゾン（野牛）。アルタミラ洞窟、スペイン。約 1万 4,500 年前、長さ 168 センチ（株式会社テクネ刊、画像データベース『先史人類の洞窟壁画：北スペイン篇』より）



図② 蜂蜜採り。アラニーヤ岩陰、スペイン。約七千年前。高さ五センチ（人物 左はその復元図（図面作成・小川勝）



見ていきたいと思えます。

ここにお見せするのは、スペインの地中海沿岸の山中の岩陰に描かれている絵です(図②)。保存状態がよくないので、少々補って復元したものを併せてお見せします。これを見ますと、崖が二つあって、その間に丸太のようなものを渡してあり、ロープが吊り下がっています。そこを何か袋のようなものを持った人が伝い降りて、穴に手を突っ込んでいます。人のまわりには小さなものが点々と描いてあります。この点々はおそらくハチと思われ、ということ、この穴のところにハチの巣があり、この人物は手を突っ込んで蜂蜜を採ろうとしているわけです。ハチの巣を採ることは「ハニー・ハンティング」と言つて、崖から落ちて死ぬこともあれば、ハチに刺されてけがをすることも非常に危険なことでした。ですから、このような場面が選ばれて描かれたのだらうと思えます。

蜂蜜は言うまでもなくハチが花から集めてきたものです。ですから、間接的には花という存在がこの絵に関係しているとはいえるかもしれません。描かれた時期の特定はたいへん難しいのですが、私自身はおおむね七千年ぐらい前ではないかといまのところ考えています。

もう少し新しい、六千年前くらいではないかと推定される作品をもう一つお見せします(図③)。ここには、右のほうに硬直した棒のような人物が描かれていて、ちよつと見にくいのですが、左に何か植物のようなものが描かれています。幹があつて葉があります。下には、木

から落ちた実のようなものも見えています。これも岩の壁面に描かれている絵で、そうした岩面画の中では最初に植物が表現された例といえます。

しかし、ここでもまだ花は描かれていません。実だけが描いてあります。実というのは花が咲いた結果できるので花と関係はしているのですが、花のほうは描いてありません。やはり、当時の人びとは洞窟壁画の動物と同じように、食料となるものばかりに関心を持っていたのだと思えます。

ということ、せつかくご質問いただいたのですが、花は古い時代の絵には描かれていないというのが私の結論です。

縄文人は 花に興味がなかった？

日高 ありがとうございます。そうすると、人が太古の昔から花を愛でていたかという、どうもそういうわけではないようですね。

では日本に目を移しまして、日本の縄文時代はどうだったのでしょうか。このころの人びとは土器などを作つて、いろいろな絵や模様をつけていますが、その中に花はないのでしょうか。今日は青森県の三内丸山遺跡を中心に縄文文化の研究をされてきた岡田康博先生をお呼びします。お話をさせていただきます。

縄文時代における花の表現についてお答えさせていただきます。私の発表にはスライドがありません。探しましたが、縄文土器に明らかに花を描いたものがなかったからです。日本には約四十四万か所の遺跡があり、そのうちの約五万が縄文時代の遺跡です。それだけの遺跡がありながら、そして、たくさんの発掘調査がありながら、見つけることができません。まったくないことはないかもしれませんが、それに非常に近いと考えられます。

ただ、少し広げて植物という目で見ますと、非常に数は少ないけれども存在します。ただし植物そのものを単体で描いたものではなく、狩りの場面の中に、森の木と考えられるものが表現されている程度です。これは縄文時代の後半、北海道から東北地方にかけての地域に、そういうものが十例ほどあります。

そもそも縄文時代の人びとは絵らしい絵を描くということが少なかったのですが、それでも土器の中には、シカを描いたもの、あるいは人の出産のシーンを描いたものなどが、数は少ないものが見られます。表現としては動物がもつとも多く、シカ、イノシシ、カエル、ヘビ、あるいは海獣、トンボなど、いろいろなものが表現されています。ですから、何かを表現するということは行っていたのですが、そのなかでも花や植物を対象とすることはたいていほん少なかったということになります。

では、縄文の人たちは、植物と無縁な生活をしていた

かというところ、そんなことはありません。皆さんも存じのとおり、縄文時代の人びとが食べていた食料の大半は植物性のものでした。また、日々の生活の中でも植物を利用して、土器を見えますと、植物の茎を回転させて土器に文様をつけるとか、土器の底に葉っぱを敷くといった痕跡を見出すことができます。にもかかわらず、意識的に植物を絵として表現することはまれだったわけです。

縄文時代の人びとは植物と非常に密接な生活をしていました。食料としてはもちろん、たとえば花が咲くと魚がやってくるというように、植物によって季節を知ったのではないのでしょうか。縄文の人たちの一年間のカレンダーの中には、「花の咲く時期」といった情報が織り込まれていたはず。もちろん、植物だけではなく、雪形と呼んでいる山々の雪の解け具合とかいったことも非常に重要なシグナルであったと思います。

先ほど縄文時代の人びとは絵を描くことは少なかった、そして、少ないながらも若干描いたものがあるということとを言いましたが、細かく見ていきますと、それは限られた時代や地域での現象であることがわかりました。それはちょうど縄文時代の後半に当たっているようで、縄文時代の中でも一時的に気候が寒冷化した時期といわれています。この時期には、何に使うのかよくわからないような不思議な遺物も見つかっています。祭祀の道具だろうかといわれているようなものです。これらを見ます

と、彼らの社会が非常に揺らぐような時期だったのではないかと気がします。

そのように考えると、たとえばこの時期にシカが描かれたことは、もしかしたらシカが減ったからではないか。森の木と考えられる植物らしきものが描かれたことも同様です。何かが描かれたというのは、それが少なくなっただことを意味するのではないか。すなわち「なくなるものに対する危機感」や「再生・復活の願望」が、ひよつとすると、人びとにそれを表現させる、描かせるということにつながったのかもしれないと思います。

ネアンデルタール人と「花の弔い」

日高 どうもありがとうございます。食べ物として植物は食べたのに、絵に描くことはほとんどしなかった。やはり、昔は花は愛でられていなかったのかもしれないという気になってきました。とは言うものの、いやいやそうでもないかもしれないよ、という例についてこれからお話いただきます。先ほどもちよつと申しましたシヤニダール洞窟のことです。

現在のわれわれはホモサピエンスですが、それより一つ古い、ホモネアンデルタールンシス（ネアンデルタール人）と呼ばれた大昔の人びとが、シヤニダール洞窟の中にお墓をつくりました。そのお墓の中からたくさん花の花粉

が出てきたのです。自然の状態では、そのように一箇所に花が集中しているはずがないので、これはきっとネアンデルタール人が死者を葬るときに花を捧げたのだらうという話になりました。私たちもお墓には花を捧げますが、同じことをネアンデルタール人がやっていたと。そこで、やはり人間というのはすごい話になったのです。これは六万年ぐらい前のことですから、先ほどの壁画よりも、もつと前の話です。

先ほどの小川勝さんによると、いちばん古い三万何千年前の洞窟壁画には花はまったく登場していないのとでした。しかし、それよりもさらに三万年近く前の人びとが死者に花を捧げていたとなると、話がぜんぜん違ってきます。ただ、この話には諸説ありますので、そのあたりに詳しい吹田市立博物館長の小山修三さんに伺いたいと思います。

小山修三

日高先生はネアンデルタール人が死者を花で葬ったという話に興味して、私が言おうとしていたことをあらかた言ってしまうのですが（笑）、もう少し説明します。

シヤニダール洞窟というのは現在のイラクにあります。その中にネアンデルタール人が死者を埋葬した跡がたくさんあります。その骨の下の土を分析したところ、花と思われる植物の花粉がたくさん出てきました。花の

同定もかなりできていて、全部で八種類あつた花粉のうち六つまでわかっています。ノコギリソウ、スギナ、アザミ、ヤグルマソウ、ムスカリ、タチアオイです。どれもそれほど派手な植物ではないのですが、花は花です。そして、アメリカのソレッキーという方が、一九六〇年代の後半、彼らは死者を葬るときにこれらの花を花束にして入れたのだろうと解釈したわけです。

ソレッキーはこの他にも面白い見解を出していて、ヤグルマソウやスギナなどはもしかしたら薬草だったかもしれないと言っています。彼らは病気になるっており、それを治すために薬草を使ったのだと。そうになると、手向けとしての花とはちよつと違う解釈もできることになります。

ところが、そうではないとこれらに反対する意見もけっこうあるのです。反対しているのはヨーロッパのほうの人たちが多いのですが、あの花粉は墓を作った後に雨が降つてたまたま流れ込んだだけだ、ネアンデルタール人のような原始人がそんな高級なことをするはずがないというようなことを言っています。そのようなことでも論争中です。

ですから、いまの段階ではどうとも申し上げることができないのですが、この問題で私自身が思うことを言いますと、ちよつとこれは「人はなぜ花を愛でるのか」というテーマからずれるのですけれども、ネアンデルタール人が死者に花を捧げたか捧げなかつたかで争うこと自体に、学術的な論争というよりも、時代の考え方と言いま

すか、人種的な考え方のようなものを感じるのです。

そもそもヒトの進化の道筋にはいろいろな説があつて、サルのような状態からまず北京原人のような「原人」になり、ネアンデルタール人のような「旧人」になり、クロマニヨン人のような「現代人」に進化してきた。すなわちちよつと一本の道をたどりながら進化してきたという考え方があります。これに対して、原人、旧人、新人という進化の図式は単純化しすぎて、系統が分かれるとする説も最近出ています。

旧人といわれているネアンデルタール人というのは、額が狭くて、頭の後ろが出っ張っていて、目の上が出っ張つた、ちよつと変わった風貌のヒトたちです。それが現在のヨーロッパや小アジアのあたりにいたわけです。ゆえに、もし人類の祖先がずつと一本の線で連続してきたのだとしたら、その変わった風貌の人びとがそのままヨーロッパ人の祖先ということになります。じつはヨーロッパの多くの人びとにとつて、それは非常に困るのです。英語で「おまえはネアンデルタールだ」と言うとおまえは馬鹿だ」という意味になると注意されることがあります。悪くすると人種差別の問題にまで差しかかるようなところがあります。

私自身は、たとえばネアンデルタール人の石器の作り方、ネアンデルタール人の段階からもうアクセサリーなどが始めていること、また、死者に花を捧げたかどうかは別にして、死者を丁寧に埋葬していることなどの点から、現代のわれわれと一本の線でつながっているよう

な気がするのです。日本でもネアンデルタール人の調査を続けている東大のグループ、とくに日文研にいらっしやった赤澤威さんなどは力作の本を書いておられ、「つながついていても問題ない」とおっしゃっています。しかし、ヨーロッパには「あいつらが祖先じゃイヤなんだ」というような傾向もあって、けっこう抵抗があるようです。

また、ソレッキーはネアンデルタール人が花をもって死者を埋葬したということで、「フラワーチャイルド」と表現しているのですが、これにしても、ちょうどヒッピーたちが花を愛し、平和を愛するというようなリベラルな時代に合わせて出てきたのです。そういう意味では、学者も所詮は時代の子だなと考える次第です。

日高 どうもありがとうございます。ネアンデルタール人については、いまうかがったようにいろいろな複雑なことが絡まっています。

「花を愛でる」とは何を意味するか

日高 続いて、地球研で人類学を専門になさっている大西秀之さんに、もうちょっと説明していただきたいと思えます。

大西秀之 (図版は14、15ページ)

先にご報告された小山先生は、ご自分の発表にあえて図を出されませんでした。おそらく、考古学者の思い込みを提示しないという深いご意図であったと思うのですが、代わって私が何点か資料図版をお見せすることになります。

こちらはシャニダール洞窟でネアンデルタール人が花をもって死者を吊ったという復元模型です(図①)。彼らは洞窟の中に死者を埋めました。そして、そこから花の花粉が出ました。その二つは疑いのない事実です。そして、その二つだけをもってここまで想像が広げられるわけです。

ネアンデルタールという人びとがどのような人びとであったのか、さまざまな復元図がありますので、それを二、三ご覧ください。図②はわれわれがよく一般的にイメージする、まさに原始人という趣きのもので、図③は瞳にちよつと人間性があるような感じでしょうか。図④は完全に工房の親方といった風体になっています。

そもそも考古学という学問は「出てきたもの」からいろいろな議論をし、いろいろなことを考えます。「出てきたもの」とは何かと言いますと、このような頭蓋骨です(図⑤)。そして、こうした頭蓋骨から、こちらに挙げるような像が復元されます(図⑥)。だいたい私ぐらゐまでの学校教育では、この像のようなものを一般的に教えられています。

図⑦はネアンデルタール人の成人女性の復元ですが、整形でもしない限り削ることはできないであろう眉の上の出っ張りなどは残しつつも、表情はすごく人間的です。これ以外にも、ネアンデルタールの子供の骨から復元された、現代の白人の子供と見まがうような復元画像もあります。

考古学者というのは発掘資料にもとづいて、毛むくじやらのいかにも原始人という姿から、このようにいまの人間に近い容貌のものまで、これだけの幅のある可能性を提示するのです。

さて、確かにネアンデルタールの墓から花粉が出てきたのはまぎれもない事実です。そして、墓の中のほうが周囲よりも花粉の量が多かったというのも事実として挙げられています。偶然流れ込んだのか、意図的に埋めたのか、それはわかりません。しかし、わからないにしても、ここからが問題です。仮に、ネアンデルタールというわれわれの祖先が——祖先ではないかもしれませんが——お墓の中に花を入れたということにしましょう。しかし、それは果たして花を「愛でる」ことだったのでしょうか。ここがいちばん大事だと思います。

じつは、このシンポジウムに先立って、日高所長から「人間はいつから花を愛ではじめたのだろうか」と訊ねられました。私は「そんなのはわかりません」とお答えしたのですが、すると所長は「考古学者はそういうことを考えないのか」とおっしゃられた。私は「なぜ所長はそんなことを考えるのですか」と逆に質問してしまったので

すが、よくよく考えてみると、いくつもの疑問がわき上がってきました。それは、自分は花を愛でているだろうか、そして、花を愛でるとはどういうことなのだろうか、自分は生まれてこのかた、本当に花を愛でたことがあるだろうかといった疑問です。

私はそれほど花が好きという人間ではありません。しかし、花見をしていることを考えると、外から見れば花を愛でるといふ行為をしているように見えるでしょう。とすると、考古学で考える場合は、人間がどのような行為をしたとき「愛でた」といえるのか、それをした証拠があるのかないのかということが一つ問題だと思うようになりました。

もう一つは、日高所長が最初におっしゃったように、では花という植物が人間のまわりにいつ来たのか。こういうことを、とりあえず証拠として押さえる。そこからわれわれは想像の翼を大いに広げて議論する。これがやはり面白いのではないかと思います。いささか手短かではありますが、これで終わりたいと思います。

日高 ありがとうございます。ネアンデルタール人については本がいくつも出ていまして、彼らはすごい人間だったともいわれています。脳の容量などもいまの人間よりも大きいのです。ですから、すごく進んでいるという気もするのですが、そういうわけでもなくて、進んでいなかったからこそ彼らはわれわれホモサピエンスに滅ぼされたのだという話もあります。とも

あれ、これ以上やると「ネアンデルタール論」になって、花の話ではなくなってしまうので、このあたりにしておきましょう。

白幡 小山さんにもう一度念のためお聞きしておきたいのですが、結局、シャニダール洞窟の花は、捧げたという説と、土砂が流入して花粉が洞窟内にたくさん残ったのだという二つの大きな考え方があるんですね。いまの学会ではどちらが有力になっているのでしょうか。

小山 甲論乙駁こうろんおつぱくという状態でして、どうとでも言えるというか、はっきりしたことは言えないのです。そもそも花粉を採った人はフランスの女性学者だったと思います。彼女が墓のところの花粉の量はまわりとは違うのだから絶対に意図的に埋めたと言うし、反対するほうは意地になって、「ねずみが穴を掘ってそこから花粉が入ったのではないか」などとまで言っています。

白幡 いまのところは、結局その程度のところまでしか行けないということでしょうか。植物らしきものが最初に描かれた例は、先ほどの洞窟壁画では確か六千年前ぐらいと小川さんがおっしゃっていましたね。そうすると、もし六万年前のネアンデルタールのときにすでに花を捧げるという行為があったとすると、十倍ぐらいさかのほることになるわけなんです……。

小川 花を使うことと描くことは少し違うと思います。ちなみに、シャニダールの場合は、ほかにネアンデルタールの墓から花粉が見つかったというような例がないようですし、私自身は疑問です。混入のほうが正しいのでは

ないかと個人的には思っています。

白幡 私は花は愛でるものだとこののを前提にしていたのですが、先史時代はどうだったかという議論は非常に難しいようですね。では、もう少し文明的な、もつと時代を下ったところの話をお聞きすることにしませんか。

日高 そうですね。私などはむしろ、人間という動物はほかの動物と違って生まれつき花が好きなのだ。二十万年前からそうだった、そうであってほしい、そのほうが面白いという気がするのですが。花を愛でるといふ心は人間の世界に文明というものが登場してからのことなのではないでしょうか。

エジプト、メソポタミアの 花の象徴性

日高 いま歴史的にわかっている人間の古い文明というと、おおむね六千〜七千年前からのエジプトやメソポタミアあたりになるのではないかと思います。そのあたりをずっと調べていらつしやる大阪学院短期大学の渡辺千香子先生に伺おうと思います。渡辺先生は古代メソポタミアの文献などの研究をされていて、動物のシンボリズムについてもいろいろ調べておられるのですが、今日は花について伺います。



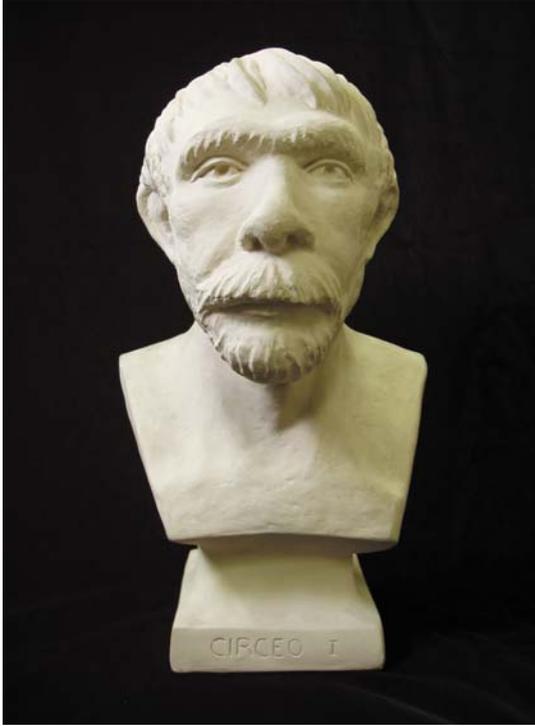
図① 死者に花を手向けて埋葬するネアンデルタール人の復元模型（群馬県立自然史博物館蔵）



図② ネアンデルタール人の復元図（アメリカ自然史博物館提供 © American Museum of Natural History）



図③ ネアンデルタール人の復元図（月本佳代美画、NHK出版刊『地球大進化』より）



図③ イタリア・モンテチルチェオ出土の頭骨をもとに復元したネアンデルタール人の胸像（国立科学博物館蔵）



図④ ネアンデルタール人の復元像「手斧を作る人」（ドイツ・ネアンデルタール博物館蔵 Neanderthal Museum/ C. Creutz）

図⑦ ネアンデルタール人の成人女性の復元図
（『PLOS Biology』二〇〇四年十二月号より）



図⑤ イスラエル・アムント洞窟出土の頭骨のレプリカ（国立科学博物館蔵）

古代の西アジアで人間が描いたもつとも古い花の例としては、紀元前七〇〇年ごろの新石器時代の壁画がございいます。こちらはトルコのチャタル・フユックから出土したもので(図①②)、お花畑を描いたものと解釈されています。黒い囲みの中に四つ、ないし六つの花びらを持った花が描かれているのがわかります。その後、紀元前五〇〇〇年ごろには、土器の装飾文として花が登場しました。これはイラク北部のテル・アルパチアから出土した彩文土器で(図③)で、真ん中の花芯から放射状に広がる花びらを持つ花が描かれています。これをロゼットと呼んでいます。

古代エジプトでは、花は古くから貴重な供物として、神や死者に供えられてきました。死者は供養として花を望んでいると考えられ、中でも白いロータスとユリの花は、貴重な供物と考えられていました。

古代エジプトで一般にロータスと呼ばれているものは、ハスではなくてスイレンの花を意味します。当時のエジプトには白い花を咲かせる種類と、青い花を咲かせる種類のロータスが自生していました(図④)。青いロータスは素晴らしい香りを持ち、そのよい香りが空気を清め、命を与えるものと見なされました。また、ロータスという花は朝開いて、夜には閉じて水面下に沈みます。そのため太陽と密接につながっていると考えられていました。エジプトの神話の中で太陽神は、原初の水に漂うロータス

の花から生じたとされ、ここからロータスは再生、復活の象徴になっていきます。こちらはロータスの花の上に表現された幼年時代のファラオです(図⑤)。

一方、メソポタミアでは、紀元前四千年紀後半から八枚の花弁を持つロゼットが頻繁に描かれるようになります。その多くは家畜とともに描かれたり(図⑥)、愛の女神イナンナの象徴と一緒に描かれたために、豊穡の概念と密接に結びついていると考えられています。メソポタミアのシュメール語で「遠い昔から」の意を表すときは、「ロゼットが出現したときから」と表記されますので、ロゼットは世界が創造されたとき、地上に表れた命の始まりを意味すると解釈されています。

ロゼットはこのように女性の頭冠にも使われ(図⑦)、メソポタミアの歴史を通じて、もつとも頻繁に用いられた花のモチーフです。また、後にギリシャでよく使われるようになり、パルメット(一般に「ヤシの葉の植物文」と考えられている)は、アッシリアの聖樹に起源するモチーフです(図⑧⑨)。アッシリアの王は、スイレンないしはユリのような花を手にして描かれていることもあり(図⑩)。

最後に、花を表す語彙について簡単に触れさせていただきます。エジプトでは花を表すのに「セチュ・シヤ」という単語が用いられ、これは「庭の香り」をも意味します。またロータスの花を表す言葉は「セシェン」、そのつぼみは「ネヘブ」ないし「ネヘベト」、花びらは「サペト」ないしは「シャペト」というように、同じロータスの花でも

部位によってその呼び名が細分化しています。

一方、メソポタミアでは、薬効のある植物や花についての記録が多く残されていますが、「花」だけを意味する一般的な単語はいまだに解明されていません。シムメール語の「ギリム」という語は、花と実のどちらの意味にも使われ、またアッカド語の「インブ」という言葉も、つぼみから花、そして実になるまでの三段階すべてに該当します。すなわち、メソポタミアでは、花が開花した状態だけを特定してとらえるのではなく、つぼみから実になるまでの一連のプロセスを、本質的には同じものの変化としてとらえていたこととなります。

エジプトとメソポタミアの語彙に、このような違いがあるというところで、私の話を閉じさせていただきたいと思えます。

白幡 ありがとうございます。確認ですが、いまおっしゃられたメソポタミア、エジプトの時期は、日本と比較すると縄文時代ごろですか。

渡辺 はい、具体的にメソポタミアの歴史時代というのはだいたい紀元前三〇〇〇年ごろから始まって、紀元前五三九年で終わっています。

白幡 そうすると、日本の縄文時代ではようやく植物的描写が現れはじめたかなという程度だったわけですが、エジプト、メソポタミアのほうではもう少し具体的に、すでに花を表現しているものが出ていたわけですね。このあたりはどのように考えればいいのか、縄文の岡田先

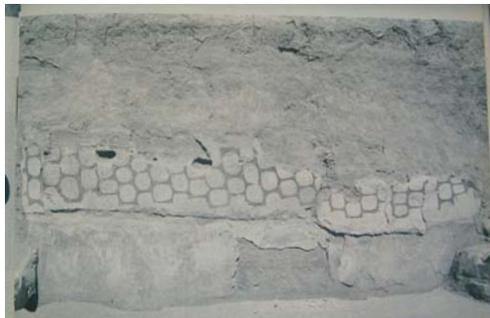
生にうかがいます。日本の場合には文明がまだエジプトやメソポタミアのように成熟した段階まで行っていないかったということもあると思えますけれども。

岡田 そうですね。いま渡辺先生が示してくださいましたように具体的に花や植物を表現したものは無いと思います。ただ、先ほどのシャニダールの話ではないですが、いまから約五千年前、紀元前三〇〇〇年ごろの縄文の遺跡では、お墓の中から花粉が見つかっているところがいくつかあるのです。北海道の例では、キク科の植物の花粉という報告があります。ですから、縄文時代には死者に対して花を捧げるということがあったのではないかと、私は考えます。

白幡 また渡辺先生にお聞きしたいのですが、この時代には文字資料が出てきますね。文字資料の中にも、彼らが花をどのようにとらえていたのか出てきているのでしょうか。

渡辺 エジプトのほうですと、とくにロータスに関してメタファーとしても使われています。たとえば、「自殺をした人の前に立つ死 (death)」は、青いロータスの香りのようだとか。彼らが言うところの死は私たちがとらえる死とは違っています。なぜかという点、エジプトでは、来世こそが希望の未来であるからです。ですから、非常に魅惑的なものの比喩として、ロータスの香りが使われていたように思われます。

一方、メソポタミアのほうはエジプトと違って現実重視の価値観を持っていますので、書き残されたことも趣き



図①② 「花畑」を描いたとされる壁画と、その書き起こし図。前7000年頃、チャタル・フユック（祠堂VI.B. 8東壁）出土（James Mellaart, *Çatal Hüyük : a Neolithic town in Anatolia*, 1967, Thames and Hudson, London, Plate41-42. 書き起こし図は Grace Huxtable による）



図⑥ 幼年王頭部。新王国朝第18王朝、前1350年頃、テーベ、トウトアンクアメン王の墓出土（エジプト博物館蔵、小学館提供、撮影／S&T PHOTO）

図⑤ 彩文土器の皿。前四四〇〇年頃、テル・アルパチア出土（イラク博物館蔵、学研提供）



図④ 葡萄の収穫。ナクトの墓壁画。新王国第18王朝、前1410年頃、テーベ、シヤイク・アブド・アルルクルナ出土（小学館提供、撮影／S&T PHOTO）





図⑥ 動物小像つき田筒印章の印影「羊を飼育する男とイナンナ女神の標柱」。前三二〇〇〜三〇〇〇年頃、推定出土地ウルク (bkk / Vorderasiatisches Museum, S.M.B. / Gudrun Stenzel / Sebun Photo)

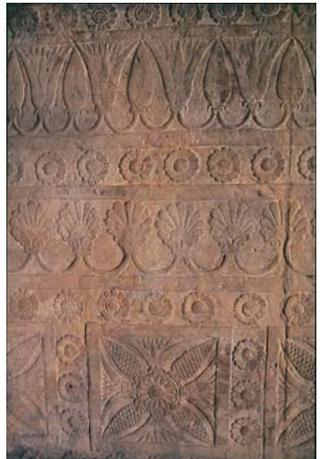
が違っています。紀元前三千年紀ごろからシュメール語で植物を分類するリストが編纂されています。残念ながら花は出てきませんが、「木」「草」「役に立つ庭の植物」というように分類され、植物の名前が羅列されています。



図⑦ 女官の頭冠。前二六八五〜二六四五年頃、ウル出土 (大英博物館蔵) © The Trustees of the British Museum. All rights reserved)



図⑧ アッシュルナシルバル二世の聖樹。前八七五〜八六〇年頃、ニムル下・北西宮殿五層の間出土 (大英博物館蔵) © The Trustees of the British Museum. All rights reserved)



図⑨ 石製舗床(部分)。前六四五〜六四〇年頃、二ネウエ・北宮殿出土 (大英博物館蔵) © The Trustees of the British Museum. All rights reserved)



図⑩ 王宮庭園の中で杯と花を手にしたアッシュルバニバル王。前六四五〜六四〇年頃、二ネウエ・北宮殿出土 (大英博物館蔵) © The Trustees of the British Museum. All rights reserved)

白幡 エジプトの壁画には庭園図というのが割にたくさん記されているそうですね。亡くなられた京都大学の岡崎文彬先生が『造園の歴史』という本の中で、エジプトの庭園図についてずいぶん書かれました。それによ

ると、庭園の植物と花はパピルスとスイレンぐらいということでした。エジプトにはもっと多様な花があったと思うのだけれども、庭園図の中に描かれているのは、パピルスやスイレンばかり、そして多くは白いほうのスイレンということでした。

渡辺 やはり、ロータス（スイレン）とパピルスが象徴的、あるいは宗教的に圧倒的に多いです。これがまたエジプトの文化を代表するものであると伺っています。

秋道 ちょっと横合いから失礼します。上エジプトと下エジプトがテーベ第十九王朝のときに統一された際、下エジプトを象徴するパピルスと、上エジプトのシンボルであるロータスを結びつけているレリーフが残っています。

白幡 いまのは地球研の秋道智彌先生のご発言でした。秋道先生には改めて後で発表していただきます。

メソポタミア、エジプトではこれだけ多様な表現が出てきている。文明というものにはいろいろな区切りがあると思うのですが、それをたとえば花で考えますと、いまおっしゃられたあたりが一つ大きな画期なのかなと思います。

花との出会いは 「環境ストレス」の結果？

白幡 さて、そもそも文明の開始というのは普通、農耕の始まりとか、あるいは人びとの定住生活の始まりなど

から考えるのですが、では、人間の文明と花の出会いというのはどうなのでしょう。

日高 要するに、人の文明が花を作った、あるいは花というものの存在を顕在化させたとするかどうか。地球研の佐藤洋一郎先生にお願いしたいと思います。佐藤先生は農耕の歴史や、植物の遺伝学的なことにお詳しい方です。

佐藤洋一郎

「人はなぜ花を愛でるのか？」というテーマでありながら、花の写真がほとんど出てきませんね。どうしたことかと思いつながら伺っています（笑）。今日は日高先生と白幡先生に質問していただいて、それに私がお答えをするというスタンスで行こうと思います。いままで考古学や先史人類学の先生方のお話を伺ってきたわけですが、「よくぞ見てきたようなことを言う、すごいな」と感心する次第で、私も負けずにやらなければいけないと思っています。

さてご質問のことですが、人と花の関係、人がいつ花と出会うようになったのかということを考えますと、それはやはり人が定住してから、あるいは農業を始めるようになってからだろうと思います。具体的には、日本では例えば縄文時代でしょうか。そんなに古いことではないと考えます。

その理由ですが、原始林には基本的に花はないのです。たとえば人間がどこかに定住して生活を始めます。その

場合、森を開いて木を伐りますね。原始林というのは鬱蒼として陽の光もさしこみませんが、人が木を伐れば光がさして明るくなります。そうすると、明るくなったところにポツポツと草が生えて花をつける。恐らく、このあたりのところがごく身近な花との出会いではないかと考えています。

農業でも同じことです。農業というのはやはりそこらあたりの木を伐ったり、畑を耕したりして、日がさすような土地ができるわけです。その空間に、人間が作物の種子を植えつけるし、ほかの植物の種子が入ってくることもある。種子で入ってくる植物は、世代交代のためにすぐ花を咲かせて種子をつけなければならない。こういう必然が働いて、人間が農耕を始めたとき、あるいは定住を始めたときに、身近なところで花というものに出会い、触れ合いを始めたと考えていいと思います。

白幡 もともと森の中に花などはそんなにないと考えていいのですか。

佐藤 絶対的に少ないと思います。いまそう言いますと、「そんなことない、あそこ森の中にもヤブツバキがあるやん」とか、「熱帯林の一斉開花をどうするか」などと反論されるのですが、いまの森は人間が作った森なのです。ですから、本当の自然の深い森には総体的に花は少ないといつてよろしいです。

日高 補足しますと、いま「花はない」とおっしゃられたのは、きれいな、いわゆる花らしい草花という意味ですね。花を咲かせて、種子をつけて枯れてしまう一年生の

植物のことです。これに対して森の木のほうは、むしろ木も花を咲かせて種子を作るのだけれども、十年、二十年、場合によっては百年も生きていて、毎年毎年種子を散らすわけです。

さて、要するに佐藤さんは、森が切り開かれて明るくなると、そこにバーツときれいな花が咲くとおっしゃいました。いわゆる花らしい花が咲くのは開けたところだと。**佐藤** つまり人間がそこに住んで、そこに攪乱を加え続けるというのが、ポイントの一つではないかと思えます。

日高 人が住めば開発されますし、その辺をドタドタ歩いたりしますから、木も生えなくなりますね。そこに花が咲く。

佐藤 はい。ですから、それは植物の側からしてみれば迷惑なことかもしれない。しょっちゅう人間が来て刈りますし、人間が連れてきた動物に餌として食われたりします。ですから、彼らにはけっこうストレスだろうと思います。ですから、花というのはそのストレスの結果として現れた格好なのかなと私は想像いたします。

それから、縄文時代の花ですが、これも私の想像ですが、あまりきれいな花はなかったように思います。縄文時代の遺跡からはいろいろな植物の種子が出てきますので、どのような植物があったかについては専門の方に説明していただければと思います。また、少し時代が飛んで奈良時代ですが、『万葉集』などにいろいろな植物が出てきます。山上憶良の歌に、「萩の花 尾花 葛花 撫子の花 ……」というのがあります。あれなどを見ますと、当時

の花はこんなのだったのかと思ったりしまして、おそらく縄文時代から憶良のころまでは、日本列島の花といえば、この歌に出てくるような花だったのではないかと私は想像しています。

白幡 あの山上憶良の歌は非常に珍しい歌で、植物の名前を挙げただけで、あとは何とも言っていませんね。感動したとも何も言っていない歌で、よくあれで和歌だったなと。しかし、たいへんりっぱな歌だとも思っています。

さて、人類史で言いますと、森から草原へという変化が人類史の発展だといわれています。そして、いろいろなことで攪乱をする。人間の攪乱の中に花が出てくる。地球研は自然を守らなければいけないという立場だと思いますが、あまり花を研究していると、地球研としては攪乱の問題、自然を破壊するものの研究ということにながってしまうかもしれないですね(笑)。

佐藤 いや、地球研は人間文化としての環境のほうです(笑)。

白幡 そうですか。それで、要するに憶良が詠んだ歌というのは、やはり攪乱の結果を歌っていると考えてもいいのですか。

佐藤 僕はまさにそうだと思います。憶良が「攪乱」という言葉を知っていたかどうかは知りませんが、ハギの花などというのは、『万葉集』のトップに出てくる植物ですので、やはりあれは憶良の個人的興味というよりは、あの時代の風景なり景観を反映した歌であろうと

思います。

白幡 いまのわれわれの感覚からすると、あの歌はたいへん美しい自然を賛美しているように見えるのですが、ハギやらクスやら。

佐藤 それを言うと、自然をどう定義するかという問題になってきますよね。それは自然というよりも、人間が作った自然。日本では「自然」という言葉はいろいろな意味に使われるのですが、あれは人間が作った自然であり、かつ、そういう人間が作った環境に入ってきた花であるというように見たいと思います。

日高 人間が攪乱すると花が出てくる、大昔から花があったわけではないということで、この点についてはまた後で議論したいと思います。ありがとうございました。

虫に愛されるべく花は 美しくなった

日高 さて、そうであるとしても、人間はやはり花が好きだと考えるところと、なぜ好きなのだろうか。その答えとしてしばしば出てくるものに、「きれいだから」ということがあると思います。誰でも花を見たらきれいだと思えます。「花よ蝶よとかわいがられ」などという言葉があります。「花よ」と言ったらきれいなもので、「蝶よ」と言ったらきれいなものです。ですから「蛾」であっては絶対いけないので、「花よ蛾よ」と言われたら非常に困

ります。しかし、よく考えてみると、花は人間のためにきれいなのだろうか。

私などは一応、動物学をやっていますので、やはり花は人間よりも昆虫などのために存在しているのではないかと思うのですが、その辺のところを昆虫行動学の鳴門教育大学の小汐千春さんにお話していただきたいと思えます。

小汐千春

(図版は26、27ページ)

私の研究は「花よ蝶よ」のどちらでもなく、いちばんメインにやっているのはじつは蛾の研究なのですが、今日は花に関してお話させていただきたいと思えます。

先ほど日高先生がおっしゃったように、花はやはり、私たちの目には美しく映ると思います。しかし、花ならば美しいかといえば、そうとは限りません。

こちらの写真(図①)は、皆さん何の花かわかりでしょうか。ご存じの方はご存じのスギの花です。私はスギ花粉症なので、この写真を見るだけでくしゃみが出そうになります。この写真を撮るときも決死の思いで撮りました。ご覧のとおり、あまりきれいではありません。スギは雄花から雌花へ、大量の花粉を風に運ばせます。風に花粉を運んでもらうために、その花粉は小さく軽くできていて、しかも大量に作られますから、その結果、われわれは花粉症になってしまっわけです。

この写真はマツの花です(図②)。マツの場合も、やは

り風によって花粉が飛ばされます。マツの花粉症の方もおられると思います。このように、風によって花粉が運ばれる花というのは比較的目立たなくて、あまり美しいとは言えないような花が多いわけです。

しかし、もちろん美しい花もたくさんあります。では、美しい花とはどのような花かというところ、結論から先に言いますと、昆虫、あるいは場合によっては鳥によって花粉を運んでもらうような花です(図③)。どれも美しいですね。しかし、昆虫にしてみれば、花が美しいから寄ってくるわけではありません。花から蜜や花粉を食べ物としてもらうために寄ってくるのです。花はおいしい食べ物のあるかなのです。そして、結果として花粉を運ばされてしまう。つまり、昆虫は花に花粉や蜜といった食べものをもらい、花は昆虫に花粉を運んでもらって子孫を残す。花と昆虫はお互いに利用し合っているわけです。花はなるべく昆虫を多く引き寄せたい。そのための戦略の途上で、花の美しさというのが進化してきたといわれています。

私たちが花を美しいと感じる基準を考えてみましょう。まず色、形、花の大きさ。また、たくさん花が集まっているような数の多さというの、美しいかどうかに関係すると思います。加えて香りもあります。こうした点は、なるべく多くの昆虫を引き寄せるための手段です。

たとえば色。色とりどりの花がわっと集まっていると私たちは美しいと感じますが、昆虫も花の色に引き寄せられます。私たちは色を識別することができますが、昆

虫の仲間にも、色を見分けることのできる種類がいくつもあります。彼らは私たちと同じように色を見分けられますし、場合によっては紫外線という色まで見ることが出来ます。それを利用して、花はさらに巧妙な仕掛けを昆虫たちにしかけています。

この写真はツツジの花ですが、花卉にちょっと色の濃くなっている部分があります(図④)。この部分は私たちの肉眼でも見えますが、紫外線の色で見るともっとはっきり見えるそうです。そして、この濃くなっている部分は昆虫に蜜のありかを示す道しるべになっていて、いわれています。昆虫はその道しるべをたどって蜜にありつくわけです。花のほうは、昆虫に無事にたどりついてもらうことによつて、花粉を効率よく運んでもらえるわけです。

アブラナなどは、私たちの目にはただの黄色い花に見えますが(図⑤)、アブラナの花でも真ん中のほうに昆虫に対するアピール、道しるべが紫外線で見えるようになっていようです。

こちらの写真はシヤガです(図⑥)。このようなアヤメ科の花も、花びらの色の違った部分に虫だけに見える道しるべがあるといわれています。私たちの目にはそういうことはわかりませんが、色がアクセントになってきれいだとか、濃淡の染め分けが美しいとか、つい美的な観点で見えてしまうのですが、それは花たちが人間ではなく昆虫たちに仕向けている仕掛けなのです。

レンゲの花も美しいものです(図⑦)。レンゲの花はよ

く見るとたいへん複雑な形になっていますが、この複雑さもじつは昆虫に対して仕掛けられているもので、ミツバチのような特定のハチが訪れやすい形態になっています。ハチが訪れると、複雑な構造がパツと開いて、ちゃんと花粉や蜜のありかにたどり着くことができます。花のほうもミツバチに確実に花粉を運んでもらうことができます。こうして特定の花と昆虫が結びつくことによつて、花は自分と同じ種類の花に花粉を運んでもらうという効率のよい仕組みになっています。

こちらはツリフネソウといわれる種類、あるいはその近縁のキツリフネといわれる種類ですが(図⑧)、これも非常に巧妙な仕組みになっています。花の奥の部分に蜜をたくわえています。ハナバチはこの奥まで潜り込むことによつて初めて蜜にありつけるのですが、そのときに、潜り込んでいるハチの背中にちょうど花粉がつくような形状になっているようです。

私たちが花を美しいと感じる要素としては、色や形や数や大きさといった視覚的なもののほかに、先にも申しましたように「香り」という嗅覚的な情報もあります。しかし、これも私たちにとっては必ずしもいい匂いばかりではありません。

こちらには有名なラフレシアの絵です(図⑨)。非常に強力な悪臭を放ちまして、ハエが呼び寄せられて花粉を媒介するといわれています。ラフレシアはたいへん大きな花ですが、一方、花そのものは目立たなくても香りの強さで昆虫を引き寄せる、あるいは夜行性のガを引き寄せる

ような甘い香りを放つハマユウなどもあります。花の香りは私たちにとっていい香り、悪い香り、さまざまですが、やはり花が昆虫を引き寄せようとしている武器の一つだと考えられます。このように、花は昆虫を引き寄せるべく進化してきているといえるのです。

日高 ありがとうございます。お聞きのように、花は人間のためにきれいなわけではありません。花をきれいだとか、素敵だとか感じるのは人間の思い込みではないかというような話になりました。そうすると、花を愛する気持ちは人間の片思いなのか。人間はきれいとかかわいいとか言いながら花を一所懸命飾っているけれども、花にしてみればそんなことは何も関係ないのかもしれない。しかし、考えてみると、案外そんな片思いから花の文化は始まっているのかもしれないね。

日本人と花見の文化

白幡 さて、ここまでのところは、最後の小汐さんを除いて考古学、民族学、あるいは先史時代のように資料があまりない時代の議論を中心にしていただきました。これから先は比較的新しい時代の花の文化を、私を含めて四人でお話したいと思います。そして、デイスカッサントの先生方十人のご発表がすべて終わったところで、その後一時間くらい、聞き足りなかったことや語りきれなか

ったことを話し合いたいと思います。では、まず私からお話します。私は、人はなぜ花を愛するのかというよりも、花を愛ですぎて困るぐらいの日本人の話をしたいと思います。

白幡洋三郎

（図版は27ページ）

毎年四月になると、われわれ日本人は大挙して「花見」に出かけます。たとえば、花見の時期の一週間に、上野には例年おおむね三百万人の人出があるといえます。年によつては五百万人も押し寄せるそうです。一つの場所へ一日に五十〜六十万人の人が花見に出かけるような国は世界にありません。日本だけです。ですから花見は世界に誇る日本文化といえます。唯一の例外はブラジルで、ブラジルの日系人は花見をします。が、これは日本から持ち込んだものです。世界の人びとは日本人のやるような花見などしません。

ブルガリアには六月に「バラ祭」というのがあります。しかし、これはバラの香油を採るための収穫祭で、四百万個のバラの花からたった一キロの油が採れるという、そのような高級品を作るための生産の祭りです。そうしてみると花を愛でるゆえの祭りなのかどうか、ちよつと断言しにくいところです。

しかし、よく考えてみると、日本の花見だってあまり花を見ていないのではないのでしょうか。「花より団子」というか、「弁当と酒が大事」というのが私の説です。とは



図① ツツジとミツバチ



図① スギの花

図②
アブリナ

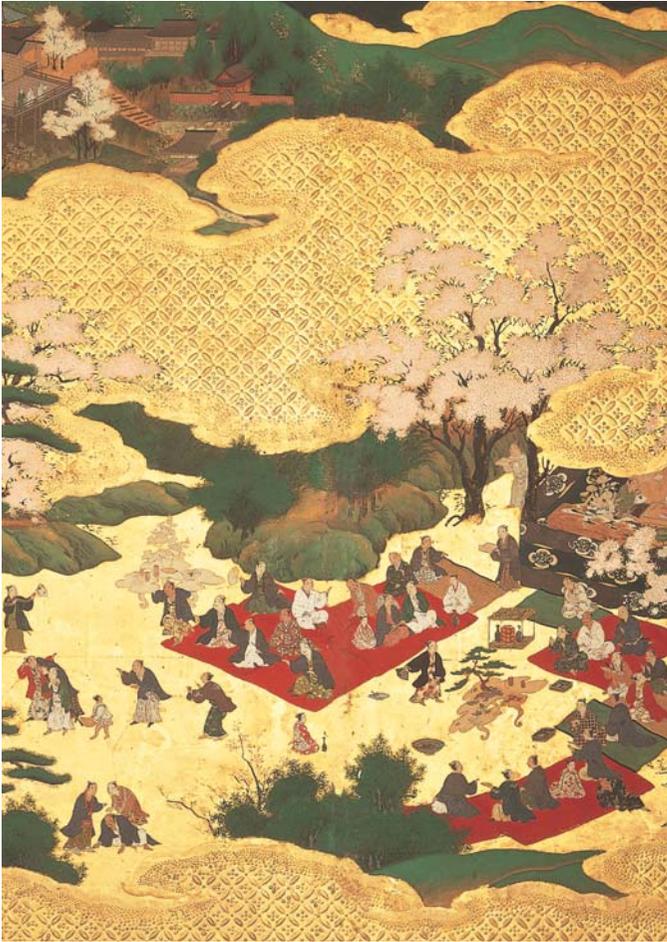


図② マツの花

図③
シャガ



図③ チョウやハチが集まってくる美しい花々



図① 「東山遊楽図屏風」(高津古文化会館蔵)



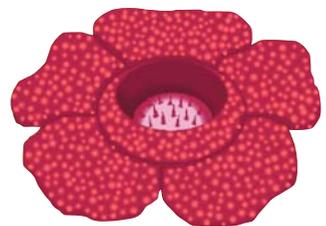
図② 「東山遊楽図屏風」より、島台を担いだり、扇子を持って踊ったりしている人びと



図⑦ レンゲとミツバチ



図⑧ ツリフネソウ



図⑩ ラフレシア

いえ、花がなくては花見は始まらない。花がなければ弁当も酒もないので、宴会をする意味がないのです。

日本の花見というのは、目的もないし、何も生み出さないし、生産的なものではまったくありません。ただ花を見て、皆ご機嫌がよいというだけのイベントです。しかし、その背景には、やはりサクラに対する日本人の深い思いがあるのではないかとも思うのです。宮廷文化から考えますと、花見というのは大体いまから千二百〜千三百年前に始まりました。もし農耕が始まって、田植えのときの祈願、つまり米の収穫に対する祈願というところで始まったのであれば、花見のルーツは弥生時代から始まると言つていいかもしれません。

ここにお示ししますのは、「東山遊楽図屏風」です(図①)。花見の図ですが、あまり花を見ている様子がない人たちがたくさん描かれています。たとえば「島台」という飾り物を担いで、踊っている人がいます。島台は座敷に飾る道具なのですが、屋外に持ち出して、その前で扇子を持って踊っている人もいます(図②)。彼らは単に花を愛でているわけではありません。春の生命とか、花が咲いているうきうきと明るい季節の楽しさを、いろいろな芸能に乗せたり声に出したりして、体で表現しているわけです。

なぜ人は花を愛でるのかを考えると、日本の花見を例に考えてみますと、「日本にサクラがあるからだ」という意見があります。しかし、それはどうなのでしょう。中尾佐助先生によりますと、ネパールやブータンでは見

事なシャクナゲが咲くのに、人びとはまったく観賞しないそうです。私も行って見たことがあります。シャクナゲの花見というのは存在しませんでした。

現地のお寺に行きますと、鉢植えの花などが飾つてあるのをよく見受けれます。それはどんな花かというところ、だいたい外来のヒナギクやコスモスなどです。自生の花ではなくよそから渡ってきた花を鉢植えにしている。見事なシャクナゲが地元で咲くのに、それは愛でない。花が目の前にあつたら愛でるかというところ、そうでもないわけです。

中尾さんはそこから、美意識というものはもともと目の前にあるものから自然に、本能的に芽生えることもあるけれども、むしろ学習といますか、文化的、あるいは社会的に作り上げられていくことのほうが大きいのではないかと。この二つの美意識はやはり区別して、花を愛でるということを考えるべきではないかとおっしゃいました。

たとえば、日本でたいへん愛でられる花が、世界ではほとんど愛でられないことがあります。その逆もあります。たとえば日本ではヒガンバナを庭に植える人はほとんどいません。死者につながるようなイメージを持っているからです。田んぼのあぜなどに自然にはえていることはありますが、わざわざ庭に植えたりはしません。ところが、アメリカの庭園などでは好んでヒガンバナを植えることがあるのです。形や色からすればけっこう美しい花ですから、単純にきれいだと思つて、つまり本能的な美学で植えるわけです。日本の場合は不吉なものの象徴

だとして植えない。こちらは後天的・文化的な約束事といえます。

そういう点で、美意識というものは、本能的なものと、後天的・文化的なものに分けて考えるべきではないかというのが中尾佐助さんの意見でした。そのようなことをベースにして、なぜ人は花を愛でるのかということをもう一度考え直してみたいと私は思いました。

花の贈答は「格差」の表れ

白幡 では、次の方に移りたいと思います。日本では歴史的に花がどのように愛でられ、どのように利用されてきたか、大阪外国語大学の武田佐知子さんに紹介していただきたいと思えます。武田さんは服飾の文化史が専門です。よろしくお願ひします。

武田佐知子 (図版は30、31ページ)

『古事記』の中に、ヤマトタケルが「命の全けむ人は たたみこも平群の山の 熊白檮が葉を 髻華に挿せ その子」と詠んだ歌があります。この歌は、頭に「髻華」や「挿頭」や「鬢」といわれる、草や花を挿して、その植物の生命力に感応して人の命が長く続くように祈ったことを表しています。昔の人はこのようによく頭の髪に飾りをつけました。そのときの飾りは必ず生きた草花で

なければなりませんでした(図①②)。

こうした髪飾りは、後に冠の制度が導入されてからは、形を変えて引き継がれることになります。

聖徳太子の冠位十二階というのは、七世紀の初頭に中国、朝鮮の制になぞらえてできたわけですが、そこでは色で身分の差を表した帽子をかぶり、そこに生の花の代わりに、金、銀、銅で作った造花の「髻華」という花を飾ります(図③)。この冠は天皇から諸臣に与えられる決まりであつて、逆はありませんでした。

冠の制度は次第に変化して、八世紀には金、銀、銅の造花を加える冠は廃止され、役人は一律に黒い冠をかぶるようになります。八世紀の半ばには、五月の節句に黒い冠にシヨウブの花をつけてこない者は宮中に入ることを禁じるといふ法令が出されます。これは古い習慣の復活として位置づけられまして、花を頭に飾るかつての慣行が根強かつたことを意味しているのではないかと考えられます。

このように、頭の花飾りというのは、記紀神話のころからたいへん古い習慣として行われていたらしいのですが、不思議なことに埴輪像の中には、頭に花を飾る人物の例を見出すことができません。伊弉冉尊(イザナミノミコト)は火の神を出産したときに生まれる子供の熱さに焼かれて死にますが、『日本書紀』には、その遺体は紀伊の国の有馬村に葬られたとあります。土地の人は伊弉冉尊の霊を、花の季節には花をもって祭つたと伝えていまして、このことは、花は霊前に集う聖者たちの装身



図① 上村松篁「万葉の春」(松柏美術館提供/近畿日本鉄道株式会社蔵)



図② 賀茂祭で葵の蔓をつけている齋王 (中田昭撮影/芳賀ライブラリー提供)



上図より、挿頭花をつける貴公子の部分



礼冠。公家の正装である礼服用時に用いられたもの (冷泉家時雨亭文庫蔵)

図③ 挿頭、右上と右下が、金銅製の挿頭で、江戸時代の大会祭に用いられたもの (冷泉家時雨亭文庫蔵)



の具ではなくて、死者に捧げられるものとして位置づけられていたことを物語っていると思います。埴輪は葬送儀礼を表現したものだといわれていますので、埴輪像自身の花をまつことはないと考えられるのだと思います。つまり、そこに集う生者たちの身を花で飾ることはなかったというわけです。

こちらの写真(図④)は、現在、有馬村の花窟神社で行われている祭礼です。新しいお祭りらしく、非常に今風の、



図④ 熊野・花窟神社の花のまつり (宇野五郎撮影/芳賀ライブラリー提供)

絹糸細工の挿頭花(熊野速玉大社蔵)



ヨーロッパ的な花束を伊弉冉の霊に捧げていますね。じつは、生きている者どうしが親愛の情の表現として花を贈り合う風習は、日本では意外に最近まで根づいていませんでした。その理由は、花がもともと死者や仏への捧げ物であったからではないかと私は考えています。

饞別せえべつを意味する「はなむけ」という言葉は「馬の鼻向け」から来たといわれていますが、そうではなく、本来は花を飾って別れの宴を催すことが源のようです。つまり、

花を贈る側と花をもらう側には常に一線が引かれていて、生と死、衆生と仏、残る者と旅立つ者というように、立場・次元を異にする者の間で贈答されていたのだと思います。病氣の人に花を贈ることは、花の生命力を病人に授けるという類間呪術的な意味合いで解釈されていますが、これとても病人と健常者という格差の間で行われる贈答であることに変わりはありません。

突き詰めていきますと、日本では花のやり取りというのは、段差のある人びとの間でのみ行われたのではないかとこのような想定がつかえます。芸人やひいき力士への心づけを「花」といいますが、これはまず見物のときに造花を送り、翌日お金を届ける習わしから来たものだとされます。歌舞伎の「花道」も、ここを渡って客が役者に花を贈ったことからついた名前だとされていますし、「花形役者」は花を贈られるほどの才能の持ち主というのが本来の意味です。芸者や遊女の料金を「花代」というのは、花に代わるものとしての金銭という意味でもあります。

このようにどの「花」も、遊芸者と客の間のお金のやり取りに起源のあることが確認できます。花は、客やパトロンが芸人に褒美として出す金品の代名詞だったというわけです。これら遊芸者と客人の間にも当然落差があります。そうしてみると、花は対等な人の間で贈答されるものではなかったということが、ますます明白になってきます。

では、最初に申しました頭に挿す花はどうかと言うと、

冠位十二階では、官人が頭に挿す髻華という花は天皇から賜与される決まりになっていました。つまり、天皇と官人という身分の落差の間で、上から下へ向かって与えられる存在だったわけです。この冠は、やがて廃止されますが、頭に挿す花は天皇から与えられるものという位置づけは長く残ります。

平安時代の儀礼書には、大嘗祭等の祭礼や儀式のときに、天皇からフジやサクラ、キクなどの花を冠に挿してもらうことになっていたとあります。これを「かざし花」というのですが、儀礼の参列者が一律に天皇から冠に花を挿してもらうことで、天皇と花を与えられた参列者との身分関係が確認されたのだと考えられます。ここで与えられた花というのは、大臣はフジやサクラ、参議はヤマブキというように、種類に違いはありますが、いずれも生花です。これは冠位十二階などの金銀銅などの造花とは大いに意味が異なっていますが、公卿のメンバーシップといえますか、生花を挿すことによって、天皇に対する臣下の集団ということを一律に示す効果を持ったのではないかと考えられます。

『万葉集』の中に、「島山に照れる橘髻華に挿し仕へまつるは卿大夫たち」という歌があります。これは八世紀半ばの新嘗祭のときに歌われたものです。八世紀においても、儀礼のときに花を頭に挿すということが、天皇に仕える公卿たちのメンバーシップの視覚表示になっていたことの証拠です。

要するに日本では、花を贈られ、それを一様に頭に飾

る側には集団の意識が芽生えても、花を贈る側と贈られる側の間には、そこに落差が認められる以上、仲間意識、親愛の情は芽生えようがなかったのではないかと考えられます。日本における花のやり取りが同等の者同士、とくに恋人たちの間で行われることが長く根づかなかったのは、あるいはこんなところに原因があったのかもしれないと私は考えています。

白幡 どうもありがとうございます。いまの日本では花のやり取りはそれほど深い意味なく一般的に行われていますが、本来はどのような意味を持っていたのか、その根源に迫るようなお話だったと思います。

花に「物語性」を託すということ

白幡 では続きまして、今度は美術や芸術の専門の方に、西洋あるいは日本における花の愛で方、利用の仕方のようなことを探っていただきたいと思います。高階絵里加さん、お願いいたします。

高階絵里加

(図版は34、35ページ)

人はなぜ花を描くのかというのが、私のテーマです。美術の研究しておりますと、古今東西、花が描かれた絵は非常にたくさんあります。皆さんもいままでに絵画

作品をごらんになって、花の絵の多さをお感じになったことがあるのではないかと思います。人はなぜ花を描くのか。もちろん花の色や形が美しいということがあるのでしょうか、そのほかに、人間はやはり花の中に特別な意味やシンボルのようなものを見出してきたからではないかと思います。

ここにお見せするのは、十五世紀のイタリヤの画家ボッティチェリが描きました「春」という作品です(図①)。(2)。この作品にはたいへんたくさんのお花が描かれています。一説には全部で四十種類以上ともいわれていますが、その花と描かれている人物が、全体として春を表しているといわれています。

絵の中でも、とくに「春」を象徴するのが右側のグループです。一番右側の人物は西風の擬人化です。ゼフェロスという西風が西のほうから吹いてきて、強い風ですから木がしなっています。西洋では西風というのは春を運んでくる風です。西風に捕まっている女性は冬の大地のニンフのクロリスです。冬の大地は西風によって春の便りを受けて、花を咲かせます。ですから、彼女が西風に捕まった途端、その口からさまざまな色と香りの花がこぼれ落ちるのです。

その左に立って堂々としているのは花の女神フローラです。じつはこの冬のニンフと花の女神は同一人物で、クロリスは西風に捕まった途端、口から花をこぼれさせてフローラに変身するわけです。冬から春になって新しい生命が芽生え、すべてのものが再生する、繁殖するという



図② 右図より、フローラとクロリス



図① ボッティチェルリ「春」。1477～78年頃（フィレンツェ・ウフィツィ美術館蔵／オリオンプレス提供）



図④ 尾形光琳「燕子花図屏風」。江戸時代、六曲屏風、国宝（根津美術館蔵）

たいへんにおめでたい春の気分が美しく表現されているわけです。

絵を拡大してみるとよくわかるのですが、じつにさまざまな花が描かれています。西洋において花は春の生命力、復活、そして繁殖。物が皆死に絶えていた冬が去って春が訪れ、新しい生命をうたいあげるといふこと、このようにたくさん花が描かれているのです。

また、キリスト教の宗教画においても、花というのはたいへんに重要な役割を果たしてきました。一例ですが、キリスト教美術においてはとりわけ聖母マリアとともに



図④ シモーネ・マルティニ「受胎告知」。1333年（フィレンツェ・ウフィツィ美術館蔵／オリオンプレス提供）



図⑤ 尾形光琳「八橋蒔絵螺鈿硯箱」。江戸時代、国宝（東京国立博物館蔵）

花の象徴が描かれています。たとえばバラは聖母の愛を表します。ここにお見せするのは十四世紀のイタリアの画家が描きました「受胎告知」です（図④）。天使がマリア様に「あなたはキリストの母となりますよ」ということを告げにくる場面です。「受胎告知」にはさまざまなパリエーションがありますが、必ずユリの花が描かれます。この絵のように花瓶に挿して描かれることもありますし、また天使が手に持っていることもあります。いずれにしても、白ユリというのは聖母の純潔、あるいは清純、その清らかさを象徴するものとして、ずっと描き続けられ

てきたわけです。

天使からの聖母へのお告げの言葉が、絵の中にそのまま描かれています。「幸いなるかな恵み多き者よ、神はあなたとともにあり」というものです。その大切な言葉の中心のところにユリが描かれています。

二例しか挙げませんでしたでしたが、このように西洋においては象徴的な意味づけとして、花というものが描かれました。

では、目を転じて日本のことを考えてみましょう。こちらに挙げますのは尾形光琳の「燕子花図屏風」で、屏風一双のうちの右隻です(図④)。先ほどの西洋の二枚の絵とは違って人間は描かれていません。カキツバタだけを金地の画面にたいへん見事なデザイン感覚で描いています。しかしながら、これはただカキツバタを描いたものではなくて、じつは『伊勢物語』を下敷きとして背景に秘めています。『伊勢物語』第九段、いわゆる「東下り」といわれる場面です。

都を離れた在原業平の旅の一行が東へやってきまして、三河の国の八橋やっはしというところに参りました。すると、水辺にカキツバタが咲き誇っている。たいへん見事である。そこで一句詠もうではないかということ、カキツバタの「か・き・つ・ば・た」の一字ずつを五・七・五・七・七のいちばん上につけて歌を詠むわけです。それは「唐衣きつつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」という都にいる妻を恋う歌で、皆が都を思い出してしみじみとするというお話です。

この屏風を見た江戸の人びとは、単にカキツバタを見るのではなく、下敷きになっている『伊勢物語』の東下りの物語の人びとや場面を思い浮かべながら眺めました。ですから、日本の場合は必ずしもその物語に出てくる人間を描きませんが、しかしながら、カキツバタだけを描くことによって、その背後にある物語や文学を暗示する暗示性ということが行われました。

こちらは同じ主題の蒔絵バージョンで、同じ光琳の「八橋蒔絵螺鈿硯箱」です(図⑤)。ここではカキツバタだけでなく八橋のほうも意匠として使われています。カキツバタが螺鈿で大変美しく配されています。やはり人間は登場しませんが、これを見た当時の人は、八橋、カキツバタということで「ああ、『伊勢物語』だな」と連想したに違いないのです。

たいへん少ない例ではありますが、西洋、日本において、このように花というのは、その後ろにある特別の意味、たとえば生命力、春の讚美、あるいは宗教的なシンボル、また文学的な暗示や背景を秘めながら描かれてきたと考えていいと思います。

白幡 どうもありがとうございました。日本もそうかもしれませんが、西洋の花の描かれ方を見ても、愛でるといふより別の意味を込めるといいますか、利用の仕方に多様な展開があるのかなという気もしました。日本、西洋両方含めて、美術における花の象徴性の歴史を語っていただきました。

どっこい、花は食べられる

白幡 では、現代において、われわれは花をどのように利用しているのか、日本、アジアやその周辺地域も含めて、その展開を地球研の秋道智彌先生にお話いただきたいと思います。

秋道智彌

(図版は38、40ページ)

花と人間のかかわりは非常に多様で、歴史的にもさまざまに変容してきました。写真で示します(①~⑥)。結婚式で使う、さまざまなお祭りを使う。日本の花笠、ユーラシアや中国の衣装にも花が使われています。人間が身につけるものの中に花のモチーフが使われて、いま高階さんがお話になったように、花の持つシンボル性、ある意味のメッセージを伝えるという解釈が文化論ではよくなされます。

宗教的にも花はさまざまに利用されています(⑦~⑩)。たとえばタイのお葬式の供花、韓国のお葬式の花。日本の山村では「餅花」をよく見かけます。お餅を花に見立てて、そこに神が宿るといような民間信仰、あるいは土着の考え方がありました。

アイヌのイナウ(けずりかけ)もあります。カムイ神がこのけずりかけを通じて、人間社会に降りてこられる接点となります。このように、何らかのメッセージを伝えるために花が利用される例は枚挙にいとまがありません。

こちらはヒンドゥー教のリングとヨニです(図⑪)。リングが男性の象徴、ヨニが女性の象徴です。紀元前ごろにはすでにリングの上からヨーグルトや牛乳、花を捧げる儀式が行われていました。先ほど見たような、日本の餅花、あるいはアイヌのイナウと同じく、「ものの先端」に神が宿るといふ共通な見方に通じるのではないかと思います。

最初に言いましたように、一言に花の位置づけと言っても文化によって多様です。恣意性もあります。高階さんもおっしゃいましたが、花の位置づけは文化によって、あるいは歴史によってずいぶん変わってきました。「なぜ花を愛でるのか」というテーマも、歴史的に変化してきたのではないか。そのようななかで、いまの私たちは、そのなぞときのメッセージをどこに見つけたらいいのだろうか。そんなことをこの半年ぐらいつと考えてきました。答えは出ませんでした。

いくつかのヒントとして、変容の中の多様性について話題を示します。ここに挙げますのは、ムユウジュ(図⑫)、ホウガンボク(図⑬)、インドソケイ(図⑭)、それから、京都の上賀茂神社のカツラとフタバアオイです(図⑮)。最後のフタバアオイですが、葵祭のときこの植物を飾って、天から降りてくる神をお迎えするわけです。古代の神話的世界が現代まで伝えられてきた例です。ムユウジュやインドソケイなどは中南米原産なのですが、現在ではタイやカンボジアで「聖なる木」として寺院に植えられています。もともと中南米の木が、なぜアジアに来て「聖なる木」になったのかよくわかりません。そのよ



図1 中国雲南省・昆明での結婚式。
花で飾った車



図2 大鼓踊の花笠、鹿児島県（国立民
族学博物館蔵）



図3 花笠踊の花笠、京都府（同）



図4 花笠舞の花笠、山形県（同）



図5 タジクのワンピース（同）

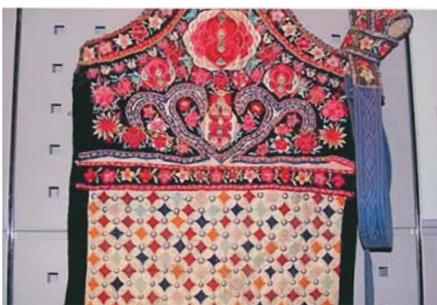


図6 中国の乳児用背負い布（同）



図7 サハリンのけすりかけ（同）



図8 タイの僧の身の回りの品（同）



図⑫ ムユウジュ



図⑨ 小正月飾りの餅花、長野県 (同)



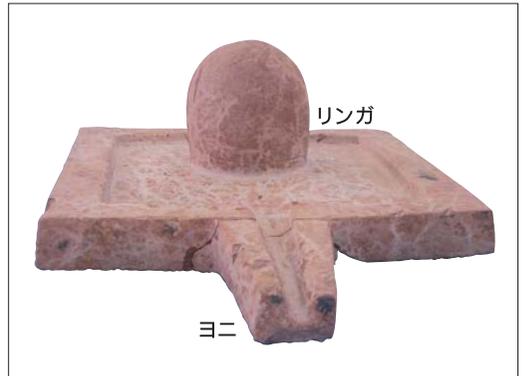
図⑬ ホウガンボク



図⑩ 韓国の霊駕船と提灯 (同)



図⑭ インドソケイ (ブルメリア)



図⑪ リンガとヨニ



図18 ブロッコリー



図19 京都・上賀茂神社のフタバアオイとカツラの飾り



図20 ホテアオイの花



図21 刺身に添えられたキクの花



図22 ランの花の天ぷら



図23 パナナの花

うに時代が変わればどんどん位相が変わっていく。あるいはフタバアオイのように変わらない面もあるので、私たちが花をめぐって複雑に絡んだ糸を読み解くのは本当に難しいなという気がしています。

さて、こちらの写真は刺身です(図16)。ご覧のように、キクの花が添えてあることが多いですね。この場合のキクは飾りでもありますが、刺身が腐るのを遅らせる役割も持っています。このように花が飾り以上のものであることも忘れてはなりません。

最後にもう一つ申し上げます。日高先生は花は食べられないし、着られないし、家も建てられない、何の役にも立たないとおっしゃいましたが、花は食べられます。たとえばバナナ(図17)、プロッコリー(図18)、それからホテイアオイの花(図19)。カンボジアではホテイアオイの花を生で食べます。ランの花の天ぷらもあります(図20)。私は先日これを中国で食べてきました。おいしくも何ともありませんでした。でも食べられることは確かです。ちなみに、いま、オランダなどではチューリップを含めて「花食」がすごくはやっているとのことで、花のレストランもあるそうです。花の文化というのはかくも変容するわけです。

食べる、飾る、析る……あらゆる人間の行為の中で、花はじつにいろいろなメッセージを発しています。そして、私たちはあまりにも花にかかわりすぎていますので、どうにも本質が見えにくい状況です。いろいろなメッセージがきわめて複合的になっているので、結論のようなもの

はなかなか取り出しにくいのではないかと思います。そんな自己批判のようなことで、私の話を終わらせていただきます。

白幡 どうもありがとうございます。いままで各分野の先生方にお話をいただいできて、一人ずつ伺ったときは私もなるほどと思うのですが、次の方のお話になると考えが変わって、先ほどの話がわからなくなるといったふうで、混乱気味なのが正直なところ。一瞬、なぜ人が花を愛でるのか理解できた気分になるのですが、次の方のお話が始まると理解できなくなる。どうしてなのだろうと。しかし、やはりこれが学問の面白いところで、いつまでたつても答えが出ないということ、商売としてはやめられないという感じもあります。それも、今回のテーマの問いが根源的だからだと思います。

秋道先生がおっしゃるように、人間の花の利用にはじつに多様な変化があつて、なかなか一筋縄ではいきません。また、亡くなられた考古学の佐原真先生は、人間の愛でる花は野生の花ではなく、手をかけて作り出した人工的な花ではないかというようなことをおっしゃっていたことがあります。人はなぜ花を愛でるのかという問いは、やはりたいへん深いのだと感じます。

人はなぜ花を愛でるのか？

総合討論

「蜂蜜」の向こうに「花」を 見ていたか

白幡 では、十人の先生方のご発表がすべて終わったところで、これから総合討論に入ります。日高先生、まず一言お願いします。

日高 最後は秋道先生のご発表でしたが、秋道さんはけっこう意地が悪くて、私が「花は食べられないのに、なぜ愛されるか」と言ったら、「花は食べられますよ、僕は食べられる花の話でしょう」とおっしゃって、その写真ばかり並べるといので、それは困りますと釘を刺して、多少減らしてもらいました（笑）。しかし、考えてみれば食べられる花も確かにあるんですね。私は菜の花の漬物というのが大好きで、そういえば自分も花を食べているなと思ったりしました。

また、武田佐知子さんには、花の贈答は格上の人から格下の者にあげるのだということを先ほど教えられました。私は不覚にもそのようなことを知らなかったのですが、今回のシンポジウムの最後に、白幡さんと一緒に皆さんお一人お一人へお花を捧げようと思っていたのですが、できなくなっていました。そのように、花を愛でるというのは非常に大変なことです。

さて、皆様からいろいろなお話を伺ってきましたが、持ち時間の制限がありましたので、本当に絞りました。ただ、本当はもっと面白い話があるのにカットしていただいたのではないかと思います。ですから、ここからは、どうしてもこれだけは言っておきたかったというお話も追加して出していきたいと思えます。また、客席の皆様からのご質問もいただいていますので、それも含めながら進めたいと思います。

白幡 持ち時間が短くて言いたいことを言い切れなかったという方、手をあげていただけますか。小山さんはいかがでしょう。まだおっしゃりたいことがありますが。

小山 喋りだしたら止まらないかもしれない（笑）。

白幡 それは勘弁してください。

小山 小川さんがお話された蜂蜜を採っている壁画のことと、その花をシンボライズして固定して壁面に描くこととの関係をどうとらえたらいいのか、私はまだよくわかっていないのですが、小川さんは当時の人びとは実用的なものにしか関心がなかったとご説明されたと思います。

あれはミツバチの巣だと思いますが、ハチというのは蜜をいつでもためているわけではなくて、花が咲くある時期に決まって蜜を集めてためるわけですから、採集する側もそんな季節感を身体に刷り込んでいたのではないかと思うのです。

そうすると、彼らは絵としては描かなかったけれども、たとえば花畑を見る、草原に花がサーッと咲いたのを見て春の訪れを感じる。ですから、彼らは表象はしなかつたけれども花を愛でていたのは多分、確実だと思います。ですから、私はあの絵を見たときに、むしろ草原や林の花盛りといったものを思い出して、彼らは絵としては表さなかつたけれども、歌でも歌っていたに違いないと感じるのです。

白幡 小川さん、いかがでしょうか。

小川 その前に会場の方からの質問にお答えします。あの絵のまわりに飛んでいるのはハチではなく鳥で、卵を取っているのではないかとのお尋ねがありました。そのようにも見えるかもしれませんが、ネパールの山岳民族などがあの絵と同様な形でロープを伝って蜂蜜を採っている記録映像などが実際にありますので、やはり蜂蜜採集だろうと私は思います。

さて、小山さんのお尋ねですが、確かにこの絵の背後に美しい蜜が採れるお花畑があるような風景を想像することはできなくはないと思います。しかし、美術の観点からは、どうしてもここに現に描かれているもの以外のごことは語りにくいのです。また、蜜というものは花から

集めてきたものなのだという認識を彼らがいつから持っていたかという疑問もあります。

小山 それは初めからあるのではないですか。季節とは密接な関係があつて、「花が咲いた、さあ蜜を採りにいこう」となったのではないのでしょうか。「雪が降っているけ



れども、採りに行こうか」ということはなかったと思います。

小川 そうであるとして、たとえば洞窟壁画に描かれた動物の絵は、やはり狩猟の危険さというものが非常に大きく心の中にあつたから描いたのです。蜂蜜を採ること、もたいへん危険な作業であつたから、また、それに取り組むことはたいへん勇敢であつたから、絵のテーマになつたと思うのです。小山さんのご指摘も非常に示唆的なのでこれから改めて考えてみたいと思いますが、私自身としては、いまのところはこの絵の背景に花に対する関心を読み取る必要はないのではないかと考えます。

白幡 実用的関心で描く、あるいは関心のないものは絵に描かないというのは、一つの考え方だと思います。一方、小山さんがおっしゃつたように、絵には描かれていないけれども、強い関心を持つていた可能性ももちろんあるわけです。ただ、やはり現実とその場面しか描かれていないわけですから、象徴の利用というものはなかなか論じにくい。ましてや人はなぜ花を愛でるのかという話にまでは持つていきにくい。これは、「人はなぜ絵を描くのか」という別のシンポジウムをやらなければいけないかもしれません。

見えないものを描く、 見えないものを詠む

白幡 人はなぜ花を愛でるのかということに話を近づけ

たいと思いますが、もしシャニダールの洞窟で、花粉が外から流れ込んできたのではなくて、ネアンデルタール人が実際に死者に花を捧げていたとしたら、捧げるといふことは愛でることなのでしょうか。

小山 難しいけれども、そういうことなんでしょうかね。たまたまそこらにあつた花をつかんで投げたというような感じではなくて、やはり死者を悼むとか……。そう見なすより仕方がないと言つたほうがいいでしょうか。ともあれ「フラワーチャイルド」と題して一九六〇年代のアメリカ人にプレゼンテーションされた段階で、すでに「花を愛でる」という解釈が入り込んでいると思います。

大西 私も小山先生と同じ意見です。実際のところはネアンデルタール人は死んだ相手が憎たらしくて、「ちくしよ、こいつ」と石の代わりに花をほこぼこ投げ込んだのだとしても、われわれには想像のしようがないのです。また、花を入れたとしても、それが本能的なものなのか文化的なものなのか、判断のしようがない。だから、「花を愛でたようだ」と言うしかないかなと。これこれこういう条件があつたら、「花を愛でる」という行為と見なすしかない、というような観点に立つた議論しかできないと思います。

日高 先ほどの話に戻りますが、関心のないものは絵に描かない。それはわからないことはないのだけれども、僕は昔、動物のことを書いてくれと言われて、『万葉集』をある人と一緒に調べたことがあるのです。『万葉集』に出てくる動物はいろいろあるのですが、たとえば鳥でい

ちばん多いのはホトトギスです。やたらにホトトギスが
出てくるのです。その次に多いのがウグイスでした。

われわれがウグイスとホトトギスのどちらを愛するか
というと、ウグイスではないでしょうか。ウグイスといっ
たら「ホーホケキョ」で、皆知っていると思います。しかし、
ホトトギスはどんな鳥で、どんな声で鳴くのかご存じの
方はそういないでしょう。ところが、万葉ではホトトギ
スのほうが多いのです。

どうして多いのかということをいろいろ調べてみたら、
『万葉集』を作った人は当時の知的な階級の人たちらし
いのですが、彼らは中国の文化に大きく影響されていて、
中国ではホトトギスは「懷古」の鳥であるらしいのです。
ですから、古いことを懐かしむような文脈になると、や
たらにホトトギスという言葉を使うのです。

たとえば、自分の古い友人のこととか昔の思い出など
を詠みたいときは、ホトトギスが何だかわからなくても、
とりあえず古き何とかのホトトギスと言っておく。そう
すると、読む人もそれでわかります。りっぱな歌を詠ん
だなどということになるのです。このときに「ウグイスや」
なんて書いたら、物を知らないということになる。

ちょっと回りくどくなりましたが、関心のないことは
絵に描かない、見ていないものは絵に描かないというこ
とも一方にあります。いま申し上げたように、実際に
はよく知らないのに表現に使ってしまうというようなこ
ともないわけではないんですね。

『万葉集』をもう少し調べてみたら、『万葉集』にはチヨ

ウの歌がありません。厳密には中国の歌の説明のところ
に二度出てくるのですが、歌ではありません。ですから、
『万葉集』にはあれほどたくさんあるのに、チヨウ
の歌は一つもない。

あるとき気がついたのですが、キリスト教のバイブル
にもチヨウはまったく出てこないのです。神様はチヨウ
のことには触れていない。当時だってチヨウは当然いた
はずで、その辺をちらちら飛んでいたと思うのです。ず
いぶん派手なものですから、よく見えたはず。なの
に記さない。これを記さないのは、チヨウというのはか
つては縁起の悪いものとして非常に忌み嫌われていたの
で、多分そのせいだという気がします。となると、見え
ているチヨウのことをあえて記さないのは本能的な要因
ではなく、文化です。ですから私は、絵には描かないけ
れども何かがある、ということもあるのではないかとい
う気がしているのです。

そのような話がある人としていたら、その方はかつて
日本ジェンダー学会の会長をしていたのですが、「洞窟壁
画には動物の絵はあるけれども、花の絵がないのはなぜ
なのだろうね」と聞いたたら、「それは恐らくジェンダーの
問題よ」と来ました。つまり、洞窟壁画を描けるような
人は、当時はみな男だったからなのだと(笑)。いかにも
ジェンダー学会の会長さんらしい発言でした。そう言わ
れればそうかなという気もするし、あるいは先ほどの縄
文土器にも花の絵がありませんでしたが、当時の土器を
作っていたのもやはり男だったのか。そういう話が入って



日高敏隆氏（左）と白幡洋三郎氏（右）

くるといろいろな考え方が出てきて、これは文化的には非常に面白い問題だなという気がします。

小川 私も会場から、洞窟壁画は男性が描いたから動物ばかりなのではないかというご質問をいただいています。この質問は時折いただくのですが、わかりません。答えられないから問題にもなりえないというように答えるしかありません。苦しい立場です。

いま日高先生がおっしゃったように、先ほどから問題になっていきますように、関心のないものは描かない。あるいは、もう少し狭めると、意味のないものは描かない。

人というのは実用的なレベルだけでなく、象徴的なレベルにしても、それが自分たちにとって必要欠くべからざる何か大切な意味を有しているようなものになったとき、初めて表現するのではないでしょうか。ですから、動物も、あるいは蜂蜜を採る光景も、やはり当時の人びとにとって生存上、欠くべからざる意味のあるものとして存在したのだと思います。だから描いたのです。そういう点では、花というものが人間の生存にとって必要欠くべからざるものになるのももう少し先なのかな、とも思いました。

白幡 おっしゃるように、絵に描かれるということは、人間が関心を持っている証拠だと思います。たとえば高階さんに説明していただいたカキツバタですが——あれはずいぶん近代に近づいています——あの場合、カキツバタに関心があるのではなくて、『伊勢物語』に関心があるという、いわゆる象徴性ですよ。直接そのものを描いているのではない。このようなことはいつ始まるのでしょうか。描かれているものから象徴性や心的な関心などを読み取っていくと、どうということがいえるのでしょうか。

高階 そうですね。古いものに関しては、基本的に残されている資料が少ないので難しいのですが、先ほどの渡辺千香子先生によると、古代エジプトの壁画などでは、すでにロータスに再生や復活をシンボライズしているというお話でした。たいへん面白かったですし、目に見えるものがすべて描かれるわけではないということも納得できるように感じました。

確かに、おそらく人はそこに何らかの必要性があつて描くのだと思います。アルタミラなどの壁画の場合は、呪術的といったらいいのか、動物というのが人間の生死、あるいは生きていくうえで必要なものであつたから描いた。そこにどんな思いを込めたかということには私にはわかりかねますが、やはり何か非常に強い思いを込めて描いた。ですから、動物というものが人びとにとつていかに大きな存在だつたかを、逆に絵からうかがい知ることができると思います。

たとえばカキツバタの作品は江戸ですが、もつとさかのぼつて平安時代ごろには、さまざまな思いを込めたマツ、フジ、サクラなどがよく描かれています。日本絵画では自然が描かれることが多いといわれますが、やはりそこには何かしら人間の思いが、必ずしもカキツバタのようにはっきりしたテキスト（物語）を背景に踏まえていなくても、何かしら人間の思いや感情、気持ちというものが入められているように私は思います。

先ほど『万葉集』のお話が出ましたが、日本の絵画というのは歌とたいへん密接に結びついておりまして、歌に詠つたものが絵画に描かれる、あるいは絵に描いたものを歌に詠むということが平安時代には頻繁に行われました。ですから歌の世界と絵の世界は非常に関係が深く、何か思いを込めるとき、人間というのは言葉にするのも絵にするのも、先ほどのホトトギスではありませんが、何か取つかかりのようなものを象徴的に使つて描き、詠むのではないかと思ひます。

渡辺 いま高階先生がご指摘されたとおりで私も考えています。私は先ほどから「愛でる」というのはいったいどういうことなのだろうとずっと考えているのですが、恐らくいろいろな側面があるのではないかと思ひます。

私たちが一般に考える「愛でる」というのは、美を愛でる、美しさを愛でる、あるいは香りを愛でるといふことが真つ先に思い浮かぶわけです。たとえばエジプトの場合ですと、いちばんの関心事として、やはり再生・復活の概念があつたと思われれます。また、メソポタミアの場合は、豊穣の概念があつたと思われれます。そして、エジプトの場合、復活の概念を表すシンボルとして、ロータスの花というのが非常に適切であつた。メソポタミアの場合は、豊穣あるいは命という概念を表すのに、ロゼットの花が非常に重要であつた。そのような含みがあつて、それぞれある特定の花が選ばれて描かれていたように思ひます。

「花への愛は「イリュージョン」か」

日高 私もそのとおりでと思ひます。が、もうちょっと突っ込んで申し上げてみます。

一般的に、われわれは絵に描かれたものを見て、これは豊穣の概念だろう、生命への祈りを表しているのだろうといったことを言ひます。しかし、本当にそうなのでしようか。それは人間が勝手に言つて、勝手にそう思ひ込んでいただけではないだろうか。人間というのは、そ

のようなイリユージョンを作って、イリユージョンの上にさらにイリユージョンを重ねていくことが非常に得意な動物です。こんなことができる動物はほかにいないのではないかと思います。

前にそのような本を書いたことがあるのですが、人間というのは非常に頭がよいですから、たとえば「花」一つにしても、いま話し合っているようにいろいろな概念を持ち込むわけです。一方、昆虫だったら、蜜を目指して花のところに行つて、蜜をおいしく食べて、そうしているうちにはからずも花粉を運んでしまう。そのとき、昆虫は「私が花粉を運んでやったから、きつとあの植物は栄えるだろう。自分の子供の代になつても餌には困らないな」なんて絶対に考えていないと思います。しかし、人間の場合はとにかくいろいろなことを考えるのです。

これはいつも話していることなのですが、人間は頭がよくなくて、飛行機も作ったし、ロケットも作ったし、すごいものを作った。けれども、頭がよくなりすぎて、もう一つとんでもないことに気がつてしまったのです。自然界には死というものがあることを知ってしまったのです。ほかの動物はそんなことには気がついていないので気楽なのですが、人間だけはいずれ自分も死ぬということを考えざるをえないから、宗教を考えてみたり、死んでも死なないのだと思つたり、死んだら神様のそばに行くのだとか、仏様になるのだとか、いろいろなことを考えないとやっていられなくなつた。

たとえば、死んだらどうなるかということ、「死後の

世界」という本がたくさんあります。死後の世界を見てこの世に戻つてきた人は絶対にいるはずがないと思うのですが（笑）、どこをどう曲がるとどこに行くといったことまで細かく書いてあります。ですから、人間のイマジネーションというか、想像力、イリユージョンというのはものすごいものだという気がしています。そんな動物である人間ですから、たとえばかつての時代に人間はこういう絵を描いていたから、そこにはこのような概念が込められていたに違いないというようなことを言うのです。

そうかもしれないし、そうではないかもしれない。しかし、それを間違っていると切り捨てることもできないのです。それをやったら、多分そういう人たちは学問ができないだろう。で、またいろいろな議論をしていくわけです。たとえば、先ほどのネアンデルタール人にしても、花を捧げたのだとか、そうではなくて偶然流れ込んだだけだとか、いろいろなことを言います。ある意味で言ったら、それで食っている人がずいぶんいるわけですね（笑）。

白幡 日高先生からイリユージョン説まで飛び出しました。人間という頭のよい動物の認識や観念によつて、単純なものごとがいろいろな意味づけられてしまうというご意見です。そうなると、花を愛でるといふのも、愛でていると思ひ込んでいるイリユージョンなのか。人間というのはいつたい花を愛でているのかいないのか。これはまた大変で、ちょっと私は言葉が出てこないのですが、ご意見がある方はありますか。

花は植物にとつては生殖器ですので、生命を次につなぐ、死から生をつなぐという意味があつて、だから人間はそれを象徴的に死者に手向けるのだともいいます。たとえば元氣再生のために病人に花を贈ります。花にはもともと何の意図もないのに、人間はそういう意味づけをすることによって花を愛でている——そのあたりまでだと私も理解できるのですが、佐藤さん、どうでしょう。

佐藤 うん、こういう議論になると、自然科学に近いことをやってきた人間はもう黙っているしかないですね(笑)。何を言つてもいい、考えてもいいという議論は、ほんとうに難しいなと思つて聞いています。答えはありませんが、これについてヒントになるかなと思つて、ずっと昔から思つていることが一つだけあります。

それは、動物の体というのは、生きているその姿がそのまま、幼いころから大人になるまで、一応その格好と見かけのまま成長していつて、死んでいきます。しかし、植物はそうではありません。とくに大きく違うところは、やはり花なのです。発芽したばかりのときには、絶対に花はありません。そして、あるときに花という、いままでにはなかったものをバツと作つて、だいたいそこでおしまひになつて死ぬ。その意味では、花には死の予感のよくなものがあるところが、動物と植物の大きな違いだろうと。しょうことない話かもしれませんが、何となくそう思います。

ですから花を描く、描かないという選択もそんなようなところにあつたのかもしれない。花というものの特殊

性というのでしょうか、それをよく考えてみたら何かヒントがあるかなと、何となくそんな気がします。答えはありません。

花の「色」に託されたもの

白幡 また面白いご意見をいただきました。武田さんはいかがですか。何か言い足りなかったことはございませんか。

武田 先ほど佐原先生が人は野生の花よりも人工的な花を愛すとおっしゃつたという話をうかがつて、ちよつと連想したことがあります。奈良時代には花というウメの花であつて、たとえば大伴家持などもウメの宴などを開いて、非常に教養的、知識人的にウメの花を愛でています。ウメは中国から入つてきた外来の花で、もともと日本の国土には存在しなかつた花です。そうしたものに非常に高級感を見出して愛でたことと似ていると思ひました。

『古今集』の仮名序に、「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」という歌があるのですが、その割りに注に、「この花は梅の花なるべし」と書いてあります。それを見て私ははつとしました。「咲くやこの花」というのは、私はサクラだと思ひ込んでいたのです。なぜかと考えたら、これは百済から漢字『千字文』を伝えた王仁の歌だそうで、仁徳天皇が位をゆずり合つてるときに詠つた歌だそうです。

この花がなぜウメとみなされるかといひますと、やは

り難波津という国際性と、それから王仁の歌ということ
でウメの花と考えたようです。そうしますと、私たちの
思い込んでいた花のイメージとはずいぶん違ったものが、
当時の人びとの心性としてあったのだなということを感じ
ました。

それから、先ほどの発表の後、冠になぜ花を飾ったの
かということに改めて考えてみたのですが、花の「色」
というのが非常に貴重だったのでないでしょうか。いま
私たちの身の回りには化学染料が非常に氾濫しています
ので、たいがいの色には驚きませんが、当時としては色
というものにたいへん敏感だったのではないかと思うので
す。たとえば、この演壇にはピンクのシャクヤクがござい
ます。古代の人でしたら、これを見たら「わあ、きれいだ」と
感激すると思うのですが、いまの私はこの花の色を見
てもそれほど感動しません。なぜかといいますが、こう
いう色は化学染料の氾濫によっていまではものすごく平
凡な色だからです。そうした色に対する価値観、花でし
か当時の人びとが手に入れられなかった貴重な色を、人
の序列の手段として用いたのかもしれないと。ですから、
花の色というのは、非常に大事だったのだらうというこ
とを考えました。

白幡 武田さんは服装の歴史の専門家であらうしやるの
ですが、日本の衣装の色というのは、ものすごく名前が
多いですよ。中間色のような色、「はなだ（縹）」とか「あ
さぎ（浅葱）」とかいう微妙な色がたくさんあって、あれ
はやはり日本の花に対する愛で方、鑑賞の細かさのよう

なものから出てきているのでしょうか。

武田 平安時代の十二単衣の重ね方なども、花に仮託し
た名前がたくさんありますね。そうしますと、これもま
た私たちの想像の及ばない、花に対するすごく細やかな
感性的世界が多分あったのではないのでしょうか。日本で
は外国のようにアクセサリーの類はあまり発達しませ
んでしたが、代わりに十二単衣のような重ねの色は非常に
発達しました。それも、やはりほかの国とは違う日本的
な特質ではないかと思えます。それも花に由来するの
かもしれません。

白幡 武田さんからは先ほど造花と生花の違いについて
もうかがいました。たとえば最初、古代の人の「挿頭」
は生物なまもの、本物であったのに、それが造花という装飾品に
代わり、今度はそちらのほうが価値が高くなったと。「花
を愛でること」の延長として、「花のようなもの」を愛
でるようになったわけです。これはどういうことなのか。
このごろはあまりはやりませんが、一時ホンコンフラワー
というようなものもありました。確かに、われわれは本
物の花よりも造花のほうがりっぱだというような文化を、
ある時期から作り上げてきたところがあります。

そこで今度は小汐さんに伺いたのですが、昆虫に巧
妙な花を用意して、色やにおいなどをうまくつけたら、
だまされて来るというような話を聞いたことがあり
ます。人間の場合はだまして造花を作っているわけでは
ないので昆虫とは単純に比較できませんが、ちょっとお
話いただいていいですか。

花のよなものに だまされて……

小汐 色、香り、形などをうまく花に似せて作ったなら、恐らくだまされるのではないでしょう。というより、実際に色紙に蜜を置いてやったら虫がやって来ることもあるので、けっこうだまされると思います。

ただ、ちよつと言いますと、昆虫と花の関係などを「花を愛でる」という文脈の中で語っていいものかどうかという疑問があります。先ほど渡辺先生なども言っておら



シンポジウム会場風景

れましたが、「愛でる」とは何なのだろうと、そこだと思っています。結局、「愛でる」というのはどういうことなのか。そこに帰結してしまふのかなと思います。

愛でているかどうかはとりあえず横に置いて、利用するというように限定すれば、昆虫たちはまさに花を利用しています。会場の方から、昆虫が花に誘因されるのだつたら、色はなくても香りだけでもいいのではないかというご質問があつたのですが、もちろん香りも重要です。しかし、色も非常に重要です。そのような花の香りや色を重要な手がかりとして、昆虫は花のところへ行き、食料を得ているのです。また、その場合、彼らは花の形や色、たとえば赤い花なら赤い色を「美しい」と感じて来ているのではなくて、赤い色のところに行けば蜜があるという「シグナル(信号)」として利用しているのです。そして、究極的には彼らが目指しているのは花そのものではなくて、花のところにある蜜だつたり花粉だつたりするわけですから、もしかしたら彼らにとつて花というのは一種の象徴(シンボル)なのかもしれません。

ですから、そういうことを言い出すと、愛でるのか、利用するのか、関わるのか、ある程度意味を限定しないと話ができないのですが、この議論の中では限定しないほうがいいのかもいずれ、ちよつと難しいところです。しかし、またそこが面白いところなのかなということも感じていきます。

日高 小汐さんと同じように、私も昆虫のことをやっていたので後を引き継いで言いますと、昆虫は非常に簡単

にだまされます。ばかばかしくだまされます。

モンシロチョウの雄は、キャベツ畑などでモンシロチョウの雌が羽を閉じて止まっているとバツと飛びつくのですが、雄に飛びつく雄はいません。ほかのチョウの雄に飛びつくやつもいません。雌のモンシロチョウだけに飛びつくのです。なぜなのでしょうと思っているいろいろ調べてみまして、その結果、においはまったく関係がなく、色であることがわかりました。私たちの目には雄雌の色の区別はつかないのですが、彼らは紫外線の反射の量で判別しているのです。

モンシロチョウの羽の裏は薄黄色をしていますから、薄黄色い紙に紫外線を反射する金属物質を少し塗って、適当にチョウの大きさをくらいいにして棒の先につけてキャベツ畑に立ててみたら、アホな雄がどんどん飛んできました（笑）。僕は男ですから、見ていて非常にがっかりしました。どうして雄というのはこんなにアホなのでしょう。本当に簡単に飛びついて、飛びつくだけならまだいいのですが、一所懸命それとセックスしようとしていました。相手は紙ですから当然無理です。すると、なぜできないんだろうと不思議そうな顔をしていました。

白幡 顔がわかりますか（笑）。

日高 はい。その他にもいろいろなことを実験しました。花というのは、要するに高等植物の顕花植物の生殖器官です。しかし、昆虫がそんなことを知っているはずはない。なのに、なぜこれが花だとわかるのだろう。花は緑色の葉っぱとは違う色をしているから多分色だろうとい

うことで、今度は色紙を出してみた。いろいろな色紙を出しますと、たいいていのアホはみな飛んできました（笑）。初めはホンコンフラワーのように、花らしい格好にしたほうがいいと思っただけでも、そんなものは関係なかったですね。いちばん花らしくないように真四角の紙を作って、いろいろな色に塗ってみたらちゃんと飛んできました。飛んでくる途中から口を伸ばしていて、完全に花だと思っていました。「このアホ」と言いたくなりました（笑）。そういうものなのです。

ですから、まさに花などは、小汐さんの言うようにシンボルなのです。ところが、われわれがそういうことでシンボル、シンボルと言っていますと、人文系の方々から怒られまして、「シンボルなんていう高級な言葉を使うな」「昆虫にシンボルがわかるはずがないじゃないか」と。でも、昆虫こそシンボルでしかものを見ていないのです。

人間はシンボルの動物だということを定義した哲学者がいます。どなただったか失念しましたが、「人間——このシンボルを操る者」。しかし、そんなことを言ったら昆虫はみな人間かということになってしまいます。ですから、あまり変なことはいわないほうがいいなと思いた。

花の愛好は後天的な文化か

小山 昆虫の話で盛り上がっていますが、ちょっと話題変更しましょう。今回のシンポジウムのテーマの一つには、

現代人の花に対する反応を考えること、それから日本人と西洋人の花に対する反応の違いを考えることとというのがあると思うのです。そこで、白幡さんにお聞きしたいのですが、かつて「プラントハンター」という人たちがいて、ものすごく活躍しましたね。あの人たちは花を取りに来たのですか、種子を取りに来たのですか。

白幡 いちばん持って帰りがつたのは株です。株というか、根っこから持って帰るのがいちばんよかったです。**小山** 本当のところは何をねらっていたのですか。花の珍しさや美しさなのか、それともペニシリンのような原料としてですか。

白幡 そうですね。私の書いた『プラントハンター』では、目的はやはり花卉、花の美しさですね。西洋のプラントハンターたちは西洋的な美的価値観にマッチする美しい花を求めて世界中を訪ね歩き、本国に持って帰りました。プラントハンターの定義を広くしますと、メソポタミア、エジプトにもプラントハンターのような人びとがいて、自分たちの地域にはない、何らかの有用性がある植物を捜し求めています。しかし、爆発的に登場したのはやはり十九世紀の西洋世界ですね。当時の西洋の知的・文化的な価値観と、「植物はカネになる」という資本主義的な経済活動の側面がぴったり合致したのです。

チベット、ネパールではシャクナゲをまったく愛でないと先ほど私は言いましたが、シャクナゲのいろいろなバラエティを徹底的に採取して持って帰ったのはイギリス人で、いまシャクナゲの種類がいちばん豊富なのはロンドン

のキュー植物園のコレクションだと思っています。ネパール山中よりもたくさんのバラエティをそろえています。イギリス人はこれをものすごく評価しています。しかし、ネパール、ブータンの人はまったく評価していません。まったく愛でなくて、ちよろちよろとした情けないヒャクニチソウなどを鉢植えて育てて、家の庭に置いている。これはなかなか不思議なことで、やはり一つの美学の座標に載せて単純に比較できる話ではないですね。それこそ中尾さんの言われた文化的な美意識という領域に入らないと思いますが、現代はそれが強く支配している時代ではないかと思えます。

日高 武田さんは先ほど「色」のお話をなさいましたが、花の色というものに対する価値観の違いも関係するのでしょうか。武田さんはシャクヤクの色をあまりきれいだと思わないとおっしゃいましたけれども。

武田 そういう意味ではなく、古代の人が感じたほどには、私はきれいと感じていないのだろうなという意味です。

白幡 色で言いますと、日本人の好む色というのは、いわゆる「渋い」とか「粹」とかいわれる中間色で、原色の人気はあまり高くありません。対照的に、西洋は原色が好きだといわれます。これは多少言い古された日欧の違いですが、やはり、ある程度真実かなと思います。

たとえばニューヨークでは、八〇年代くらいから鉢植え盆栽がたいへんはやりました。それまでのアメリカにはそのような文化はなかったと思うのですが、ニューヨーク

のアパートなどに鉢植えの小さな盆栽を置くのがはやりだ。盆栽ですから緑一色で、花は咲きませぬ。だからあまり西洋的ではないのですが、そうしたものをいいと言つて愛でる人が出てきた。これなどは先天的な好みではなく、典型的に文化的な現象なのでしようね。日本趣味というか東洋趣味というか、渋好みといえますか。

ですから、そういうことから考えますと、人はなぜ花を愛でるかという答えは、主に後天的な部分にあるということになりそうです。ただ、それだけでは説明しきれない本能的なものも、やはりどこかに残っているのではないかなという気がしますけれども。

第三の美意識

佐藤 白幡さんはいま、たぶん中尾佐助さんの話を受けて、本能的なものと文化的なものについて発言されたと思います。私はその中間的なものもあるような気がするのです。たとえば、何かの木の花の下に行くときぐくいいにおいがして、とてもいい気持ちになったことがあるとします。これは最初は本能的な愛好なのだけれども、小さいころからそんな経験がどんどん積み重ねられていくと、ある時点で文化的になる。ですから本能でも文化でもない「第三」の要素のような領域もあるのではないのでしょうか。第三の美意識は社会的に蓄積されていけば文化になります。しかし、動物の本能につながるような要素も多分に含み持っているわけです。われわれの「花



シンポジウム会場風景

を愛でる」という気持ちの一部には、こうした第三の美意識も含まれているように思います。

日高 なるほど、そうですね。ちなみに「愛でる」という言葉を辞書で引くとどうなりますか。

白幡 「愛でる」というのは、いちばん元の意味は「かわいがる」とか「いとおしむ」とかで、すなわち抱きしめたり、自分に近寄せて理解するというようなことです。二つ目の意味は「褒める」とか「感嘆する」とか、ちょっと距離を置いて眺めている感じですね。ですから、いま佐藤さんがおっしゃったように、この二つの間、少し本能的

なものとして少し文化的なものが両方合わさった中間というものもあるかもしれないですね。また、本能的なものとして社会的なもの以外に、何か個別的な体験なども加わるだろうと思います。ですから、「愛でる」というのは、単純に花を美しいと思うといったものではなく、その意味には幅と深みがあるわけですね。

日高 人間の場合だと、「愛でる」というものの裏には、積極的に愛しているのでなくても、なんとなくいい気分、すなわち「嫌じゃない」ということも含まれるのかもしれませんが。とくに花が好きでなくても、花がそばにあつたからその日一日気分がよかつたということはあると思うのです。なんとなく気持ちがいい。そういう感じでしょうか。

逆を考えてみますと、イモムシを愛でる人なんて、それはいいでしょう。昔「虫愛づる姫君」というのがいました。これは非常に変わった人だったから有名なのであつて、たいへん珍しい人です。皆さんも多分あまり好きではないだろうから、イモムシを見て一日すごく気分がよくなるということはないと思うのです。しかし、花を見たらなにかほつとしたような気持ちになりますよね。

なんとなく心を伝える花の力

日高 ということで、残念ながらそろそろ時間がなくなってきました。結局、いろいろな話題が出て、話が複雑になって、結論には至りませんでした。とくに秋道先生

の話の聞くとますますそういう感じになりました(笑)。では、最後に私がいま申し上げた「なんとなく好き」ということについて、もう少しだけ言わせていただきます。

たとえばすごく大きな樹木があつたりすると、あの木はすごい、力強いというので、神様が宿っているのではないかといった気になることがあります。そのように、非常に力強いものがあつたら、それを神頼みのようにして、何とかそれで救つてもらおうと思つたりします。でも、花に対する感覚はそうしたものではありません。

白幡 花に救ってもらおうとは思いませんね。でも、気持ちがよくなつたり、ほつとしたり、感情がなだらかに、穏やかになることは間違いないです。

日高 それから、人にご褒美としてもものをあげるときに、「よくできました」と言つて棍棒をあげたらやつぱり変なものです。でも「ご苦労さまでした」と言つてちよつとお花をあげたら、多分その気持ちは伝わるのではないでしょう。か。花というのは、どうもそういうところがあるような気がするのです。自分の気持ちは伝わる、本当に伝わるかどうか知りませんが、伝わるような気がするところはあるのです。たとえば、樹齢何百年というようなすごい大木を見て、この大木によつて自分の気持ちは伝わるというようにはあまり思わないでしょう。どうでしょうか。

白幡 私は長らく庭園の歴史をやってきましたが、戦国や桃山期の日本庭園は木や石、水の流れなどが重要で、花はあまり植えなかつたようです。秀吉、信長の時代に

は石を贈答するということもありました。もっとも有名なのは秀吉が最後に持っていたという藤戸石で、醍醐寺の三宝院の庭の中に主人石といつてでんと座っています。石を贈るなどというのはやはり戦国的で、どーんと力を示すというようなことが背景にある。ですから穏やかな人間関係が保たれているような時期にはやらないと思います。一方、花をプレゼントしたり、花を飾ったりして愛でるといふのは鎌倉後期とか室町ごろによく見られます。合戦よりも政治や権力で動いているような時代です。書院の飾りなどで生け花というのが出てきたのもこのころです。

日高先生のお話とうまくつながるかどうかわかりませんが、大木や石の持つている力と、花が持つている力にはやはりずいぶん差がある、違う性質があるのではないかという気がします。

日高 多分、ずいぶん性質は違うのでしょね。私の感じでは、花というのはたとえば先ほども言ったように、友達が入院してしまったようなとき、「早くよくなつてくれよ」という気持ちを持つているとすれば、やはり花をあげることによって伝わるのだろうなど。そのような意味で、自分の気持ちを伝えてくれる、あるいは先ほどの武田さんのお話ではないですが、間を媒介して、自分の気持ちももう一つ複雑に伝わるようなことを助けてくれる。人間にとって花は何かそんな力のようなものを持っているのではないかと思うのです。

白幡 人を心底から揺り動かすとか、強制して動かすと

かいったことではなく、ゆったり動かしたり、時間をかけてじっくり動かすというような深みがあるような気がします。われわれ日本の宗教では大木や大きな石には必ずしめ縄を巻いたりしますが、それは穏やかにしていただく、あまり力強く、暴力的な形で崇めていただいては困るといふことで、そういうことをするわけです。ですから、やはり花に感じる心情と、木や石に感じる心情はおのずと違っていたであろうと。これは日本の例ですが、そんな気がします。

日高 そのようなことで、われわれとしては花に対して、やはり何かほんのりした愛好を感じるのだけでも、それは花が本来的に持つている性質なのか。あるいは、本能的に人間が花というものに対して感じる何かなのか。佐藤さんがおっしゃるように、そのへんは明らかな文化ではないのかもしれない。私としては、花には基本的に人の気持ちを伝えるような何かの力があつて、それがもう少しいろいろと意味づけされて、時代的、文化的要素なども加わつて、洗練されていくのではないだろうかという気がしています。

とりあえず、このようなところで終わりにしておこうかと思えます。

じつは、今回のシンポジウムはたいへんすぐれていてまして、そもそも開催の「テーマと趣旨」にも、この場の議論で何かの解答が得られるだろうなどということを書いてありません。申し上げてみます。

一人は花が好きである。部屋には花を飾り、何かの機会

には花を贈る。でも、食べものでもない花が、なぜこんなに愛でられるのか？」

「中尾佐助の説によれば、人間には本能的（自然的）美学と文化的美学があるという。この見方から花の象徴的意味を採る議論もいろいろしてみたい。自然的な話と、文化的な話のからみあいが見えてきて、人がなぜ花を愛でるのか、そのわけも少しわかってくるかもしれないか

らだ。」

まさにその通り、ほんの少しだけわかってきたかもしれないというところで、終了させていただきます。本日は皆様からたくさんご意見が出ました。これを問題提起の第一歩として、少しずつ糸口を見つけていくことができたらと念願しております。

閉会のあいさつ

長野泰彦

（人間文化研究機構理事）

パネリストの先生方、オーガナイザーの日高先生、白幡先生、長時間まことにありがとうございます。パネリストの先生方には的確で興味深いお話を伺いました。また、二名で司会することはたいへん難しいので、若干危惧しておりましたが、諸先生のお話と相まって、最後のまとめなどをうかがうと、人間文化研究機構のいちばん楽しい部分といちばんわからない部分とが明確に浮かびあがってきたような気がします。

私自身はチベットを専門としております。チベット人は美しい花に囲まれて暮らしていますが、私どもと同じ感

覚で花を愛でることはありませんし、手向けに花を用いることもありません。一般的には花に無関心です。しかし、今日のお話の内容を考えると、それはむしろ見かけ上のことであって、彼らの花への態度もまた、一種の文化として考え直すべきかもしれないと思うようになりました。その意味で、私にとっても有益なシンポジウムでした。

最後になりましたが、お忙しい中お集まりくださった会場の方々に深く御礼申し上げます。今後とも人間文化研究機構の研究活動にご理解とご支援をたまわりますよう、お願いいたします。



小汐千春 (こしお・ちはる) 鳴門教育大学・助手

京大文学部動物学教室で博士(理学)取得後、1994年より現職。専攻は動物行動学・行動生態学。これまで、昆虫、とくに鱗翅類を対象に、メスによるオスの選り好み、左右対称性と性選択の関係、メスによる多数回交尾の進化、雌雄の性的対立などについて研究。主な著書に『虫たちがいて、ぼくがいた—昆虫と甲殻類の行動』(海游舎)、『擬態—だましあいの進化論① 昆虫の擬態』(築地書館)、『遺伝子の窓から見た動物たち—フィールドと実験室をつないで』(京都大学学術出版会)など(いずれも分担執筆)。



小山修三 (こやま・しゅうぞう) 吹田市立博物館長/国立民族学博物館・名誉教授

PhD(カリフォルニア大学)。専攻は考古学、文化人類学。狩猟採集社会における人口動態と自然環境への適応のかたちに興味を持ち、これまでに縄文時代の人口シミュレーションやオーストラリア・アボリジニ社会の研究に従事。この民族学研究の成果を使い、縄文時代の社会を構築する試みを行っている。主な著書に『狩人の大地—オーストラリア・アボリジニの世界』(雄山閣出版)、『縄文学への道』(NHKブックス)、『縄文探検』(中公文庫)、『森と生きる—対立と共存のかたち』(山川出版社)、『世界の食文化のオーストラリア・ニュージーランド』(編著/農文協)など。



佐藤洋一郎 (さとう・よういちろう) 総合地球環境学研究所・教授

静岡大学助教授を経て2003年より現職。専攻は遺伝学、DNA考古学。古い時代の農業、とくに品種のあり方に関心を持ち、研究を続けてきた。主な著書に『DNAが語る稲作文明』(NHKブックス)、『森と田んぼの危機』『里と森の危機』(朝日新聞社)、『稲の日本史』(角川書店)など。「第9回松下幸之助花の万博記念奨励賞」「第17回濱田青陵賞」を受賞。



高階絵里加 (たかしな・えりか) 京都大学人文科学研究所・助教授

東京大学文学部美術史学科卒、同大学大学院、イタリア・ピサ大学で美術史を学ぶ。2000年より現職、文学博士。美術における日本と欧米の交流を歴史的に調査研究し、芸術における自然と人間の描かれ方と文化によるその表現の違いに関心を持つ。最近では、人間にとってなぜ美や芸術は必要なのかを考えている。主な著書に『異界の海—芳輝・清輝・天心における西洋』(三好企画)、主な翻訳書に『モネ』『シャガール』『北斎 百人—首うばがゑるとき』『マネ』(いずれも岩波書店)、『ピカソ』(創元社)など。



武田佐知子 (たけだ・さちこ) 大阪外国語大学・教授

文学博士。日本史、衣服史。1995年「濱田青陵賞」受賞。2003年紫綬褒章受章。衣服やかぶりものを通じて、国家、社会、身分や階級、そして国際的交通を考えている。最近では、3世紀以降7世紀に至る間の、史料の空白時代について、その間隙を埋める作業をしている。主な著書に『古代国家の形成と衣服制』(吉川弘文館、サントリー学芸賞)、『衣服で読み直す日本史—男装と王権』(朝日新聞社)、『信仰の王権 聖徳太子』(中公新書)、『娘が語る母の昭和』(朝日新聞社)など。



渡辺千香子 (わたなべ・ちかこ) 大阪学院短期大学・助教授

1995年より現職。PhD(ケンブリッジ大学)。専攻はアッシリア学・美術史。古代メソポタミアの文献や図像に表現された動物のシンボリズムについて、文化人類学や言語哲学の視点を導入しながら考察。また最近では、新アッシリア時代の浮彫り彫刻に表現された物語絵画を、美学的な視点から分析する研究を行う。主な著書に Animal Symbolism in Mesopotamia: A Contextual Approach (Wiener Offene Orientalistik Bd 1)、『世界美術大全集東洋編⑥ 西アジア』(共著/小学館)、『古代オリエント事典』(共編著/岩波書店)、『古代王権の誕生Ⅲ』(共著/角川書店)など。



日高敏隆 (ひだか・としたか) 総合地球環境学研究所長

東京大学理学部動物学卒。東京農工大学農学部教授、京都大学理学部教授、滋賀県立大学初代学長を経て、2001年、総合地球環境学研究所初代所長に。京都大学名誉教授、滋賀県立大学名誉学長。1982年、日本動物行動学会を設立し、長く会長を務める。主な著書に『チョウはなぜ飛ぶか』（岩波書店、毎日出版文化賞）、『動物と人間の世界認識』（筑摩書房）、『春の教えかた』（新潮社、日本エッセイストクラブ賞）、『人間は遺伝か環境か？ 遺伝的プログラム論』（文春新書）など。



白幡洋三郎 (しらはた・ようざぶろう) 国際日本文化研究センター・教授

京都大学農学部林学科卒業。京大大学院在学中に西ドイツ・ハノーファー工科大学（当時）に留学。西洋の都市計画史・庭園史を研究。京大農学部助手、国際日本文化研究センター助教授を経て現職。都市文化、とくに目に見える形を持つ文化全般についてヨーロッパと日本・アジアとの比較研究を行っている。庭園や名所の形成、旅行や遊びの創造に花や木がどのようにかかわってきたかを考える「植物文化史」を構想中。主な著書に『日本文化としての公園』（共著／八坂書房）、『プラントハンター』（講談社、毎日出版文化賞）、『花見と桜』（PHP研究所）など。



秋道智彌 (あきみち・ともや) 総合地球環境学研究所・教授

国立民族学博物館教授を経て、2002年より現職。理学博士。専攻は生態人類学・民族生物学。これまで、東南アジア、オセアニア、日本で自然と人間の文化の関わりについての調査・研究に従事。人間が植物や動物をどのように認知し、利用するかについての民族生物学研究に興味を持つ。最近では、中国雲南省、ラオスなどで住民による動植物利用の歴史から地域の歴史を探る研究を実施。主な著書に『コモンスの人類学—歴史・文化・生態』（人文書院）、『なわばりの文化史』（小学館）、『オーストロネシアの民族生物学』（中尾佐助と共編／平凡社）など。



大西秀之 (おおにし・ひでゆき) 総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員

日本学術振興会特別研究員などを経て、2006年より現職。文学博士。専攻は人類学・考古学。アイヌ文化やフィリピン山地民などを対象とした人類学的・考古学研究に従事。現在は、生計活動に伴う発話化・言語化されがたい認知・行動様式に注目するなかから、資源管理に関わる「制度」や「規範」に対する言説と実践の齟齬を研究課題としている。主な著作に「オホーツク文化の石材獲得戦略」（『考古学研究』43(1)）、「土器製作者の誕生：カンカナイ社会における技術の伝習と実践」（『民族学研究』62(4)）など。



岡田康博 (おかだ・やすひろ) 青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室長

青森県文化財保護主幹、文化庁記念物課文化財調査官を経て、2006年より現職。少年時代から、考古学者の叔父や歴史の教員であった父親の影響を強く受け、考古学ファンとなる。大学卒業後、県内の遺跡調査に従事し、1992年から特別史跡三内丸山遺跡の調査、研究、整備、活用を手がける。主な著書に『縄文鼎談 三内丸山の世界』（山川出版社）、『縄文人がおもしろい』（NBCセンター）、『縄文の宇宙、弥生の世界』（角川書店）、『縄文時代の商人たち』（洋泉社）、『遙かなる縄文の声』（NHKブックス）など。最近では環日本海の先史文化に興味を持っている。「第4回司馬遼太郎賞」受賞（平成13年2月）。



小川勝 (おがわ・まさる) 鳴門教育大学・助教授

鳴門教育大学講師を経て、1995年より現職。文学修士。専攻は美術史学・芸術学。これまで、西ヨーロッパ、南アメリカ、東アジアにおいて、先史美術に関するフィールドワークを行う。人間ががたちを表現することで、どのように周囲の世界を認識しているかに関心をいだいている。近年は、洞窟の暗闇の中で、でこぼこした自然の岩の面にもともとあるかたちと、人間の作り出すかたちの関係を調べている。主な著書に『フゴッベ洞窟・岩面刻画の総合的研究』（編著／中央公論美術出版）、『アルタミラ洞窟壁画』（共訳／岩波書店）など。

編集後記

人間文化研究機構の5研究機関の中でいちばん新しい総合地球環境学研究所(地球研)も、関係者の方々のご尽力によって、今年2006年初頭に京都上賀茂の地に新しい建物ができあがった。

豊かな自然環境の中のそのユニークな姿の新建物にいささかの誇りを感じながら、竣工記念のイベントとしてやることになったのが、この人間文化研究機構第4回公開講演会・シンポジウムであった。

さあ、何をテーマにしよう? その相談会で、私はこの「人はなぜ花を愛でるのか?」という問題を提案した。

人間文化の根源に関わると思われるこの問題は、じつはこれまであまりあからさまに問われたことがないようなのである。それはおそらく、そこには自然にも文化にも関わるさまざまな問題がからまっています、簡単には答えられないからなのであろう。

けれど、世の中の法人化の波の中で、人間文化研究機構もできたことだ。ひとつそこで議論してみよう。そうしたら少しは何かが見えてくるかもしれない。それがわれわれの偽らぬ願いであった。

予想をはるかに上回る多数の参加者が京都国際会館の会場を埋めつくしてくださった。その方々がどれくらい満足されたかわからないが、それぞれに「人間文化」というものの深さと不思議さを感じてくださったことだろうと思っている。

人間文化研究機構

第4回公開講演会・シンポジウム実行委員長

日高敏隆(総合地球環境学研究所長)

大学共同利用機関法人

人間文化 vol.4

特集

人間文化研究機構 第4回公開講演会・シンポジウム

総合地球環境学研究所 上賀茂施設竣工記念

人はなぜ花を愛でるのか?

2006(平成18)年9月30日発行

発行

大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

〒105-0001

東京都港区虎ノ門 4-3-13

秀和神谷町ビル 2階

TEL : 03-6402-9200(代)

<http://www.nihu.jp/>

編集

山内編集事務所

デザイン

緒方裕子

印刷

協和リソアート株式会社

表紙写真

「東山遊楽図屏風」より、サクラのもとで花見に興じる人びと(高津古文化会館蔵)

資料提供・協力者

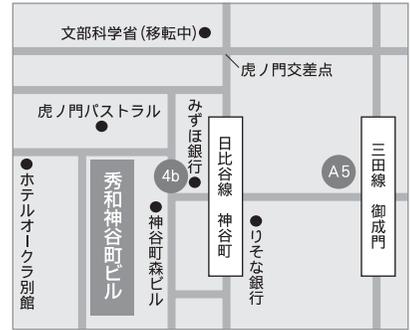
東京国立博物館/国立科学博物館/群馬県立自然史博物館/大阪市立美術館/高津古文化会館/松柏美術館/根津美術館/冷泉家時雨亭文庫/日本美術家連盟/花窟神社/熊野速玉大社/賀茂別雷神社/株式会社テクネ/NHK出版/学研イメージネットワーク/小学館フォトサービス/芳賀ライブラリー/セブンフォト/オリオンプレス/上村淳之/月本佳代美/大英博物館/アメリカ自然史博物館/ネアンデルタール博物館/PLoS Biology/Vorderasiatisches Museum, Staatliche Museen zu Berlin/Matsuzaki Communications B.V. (順不同・敬称略)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

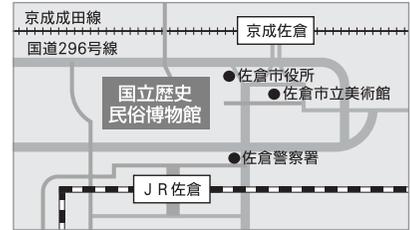
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13 秀和神谷町ビル2階
TEL:03-6402-9200 (代表)
<http://www.nihu.jp/>

(最寄り駅)
地下鉄日比谷線神谷町駅 (出口4b徒歩約2分)
地下鉄三田線御成門駅 (出口A5徒歩約10分)



国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123 (代表)
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



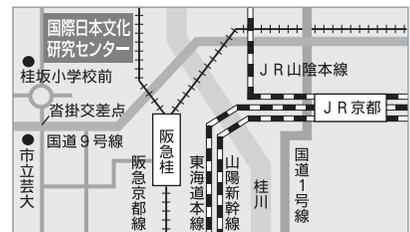
国文学研究資料館

〒142-8585
東京都品川区豊町1-16-10
TEL:03-3785-7131 (代表)
<http://www.nijl.ac.jp/>



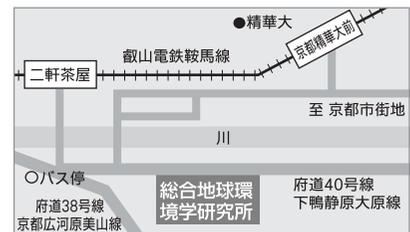
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222 (代表)
<http://www.nichibun.ac.jp/>



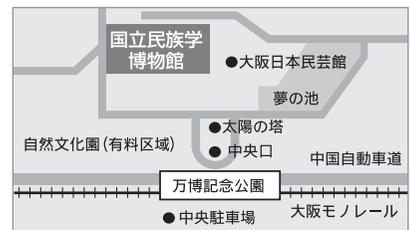
総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100 (代表)
<http://www.chikyu.ac.jp/>



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1 (万博記念公園内)
TEL:06-6876-2151 (代表)
<http://www.minpaku.ac.jp/>





大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館 国文学研究資料館 国際日本文化研究センター 総合地球環境学研究所 国立民族学博物館